

～野外活動ボランティア養成事例集（2011年度）～

児童館と

野外活動ボランティア



財団法人 児童育成協会(こどもの城)

～野外活動ボランティア養成事例集(2011年度)～

児童館と

野外活動ボランティア



財団法人 児童育成協会(こどもの城)

もくじ

児童館における野外活動とボランティア	05
児童館における野外活動(キャンプ)の意味	05
野外活動(キャンプ)とボランティア	07
野外活動ボランティアの養成事例～[子どもの城]の活動をとおして	11
□野外活動の事前トレーニング	11
準備活動にあわせて事前トレーニング	11
事前トレーニング① 組織作り～チームワークの形成	13
事前トレーニング② 役割別準備活動	15
事前トレーニング③ 現地トレーニング	17
□野外活動実施中のトレーニング	21
実際の活動をとおして学ぶ	21
野外活動実施中のトレーニング① 1日の〈ふりかえり〉	23
野外活動実施中のトレーニング② 活動記録をとる	25
□野外活動後のトレーニング	27
野外活動を終えて“まとめ”の作業	27
野外活動後トレーニング① 個人の〈ふりかえり〉	29
野外活動後トレーニング② グループの〈ふりかえり〉	30
参加したボランティアの感想	31
野外活動ボランティア養成プログラムに参加して	31

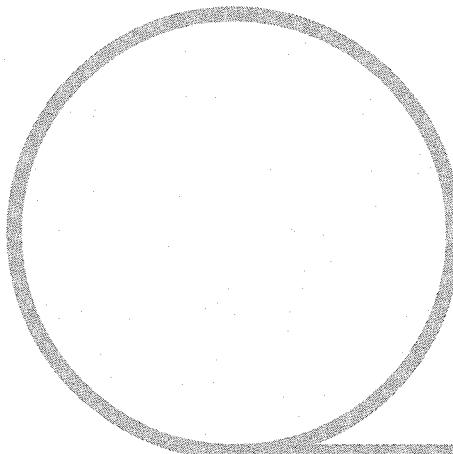


【平成 23 年度(2011 年度) 野外活動(キャンプ)ボランティア養成講座「現地トレーニング」実施一覧】

野外活動(キャンプ)講習会名	期 間	対象・定員	会場
スポーツキャンプ	7月26～29日	小4～中3(30人)	新潟県／ニュー・グリーンピア津南
ちびっこ冒険団 2011	7月31日～8月3日	小1～3(70人)	埼玉県／埼玉県青少年総合野外活動センター
ジュニア・アウトドア・スクール 2011	8月5～11日	小4～中3(75人)	宮城県／国立花山青少年自然の家
チャレンジ・キャンプ	8月25～28日	小1～3(45人)	山梨県／東京 YMCA 山中湖センター
ちびっこ冒険団 イン ウィンター 2011	12月25～28日	小1～3(45人)	埼玉県／埼玉県青少年総合野外活動センター
ジュニア・スプリング・キャンプ 2012	平成24年3月28日～4月1日	小3～中3(75人)	新潟県／国立妙高青少年自然の家

児童館と野外活動ボランティア ~野外活動ボランティア養成事例集~

発行：こどもの城（財団法人 児童育成協会）〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1 <http://www.kodomono-shiro.jp>
発行日：平成24年（2012年）3月31日
編集：こどもの城事業本部（TEL 03-3797-5668）



児童館における 野外活動とボランティア

児童館における野外活動（キャンプ）の意味

1. はじめに

都市化、高度情報化、少子高齢化、環境破壊などの言葉で表される現代生活のなかで、子どもたちの育つ環境も大きく変化しています。

都市化が進んだ生活では、安らぎと豊かな恵みを与えてくれる自然とのふれあい、その大切さやすばらしさを感じる機会が少なくなっています。また、社会の情報化が進み、スマートフォンに代表されるように、情報伝達やコミュニケーションのスタイルも変わってきました。一人ひとりが別々に情報に向きあうようになり、コミュニケーションも、人と人が直接会わない間接的な形が中心となっています。

子どもたちの生活や遊びも、外遊びが減り、家のなかで過ごしたり、一人や少人数での遊びが中心となって、“集団遊び”や“仲間遊び”的機会が減っています。遊びをとおして、人とかかわり合い、さまざまな実体験を重ねながら育つという子どもたちの環境が、大きく崩れてきています。

このような状況では、豊かな自然のなかで活動しながら、自然の美しさやすばらしさ、そして厳しさまでも体験する野外活動は、子どもたちの成長・発達にとって大切な機会になります。

自然観察、ハイキング、フィールドゲームなど、さまざまな野外活動があります。なかでも、自然のなかで仲間と一緒に何日かを過ごす〈キャンプ〉は、自然体験、生活体験、社会体験、心の体験など、日常の児童館の活動ではできない体験をする絶好の機会になります。野外活動をとおして、子どもたちに伝えたいも

のが、〈キャンプ〉のなかに詰まっています。ここに焦点をあてて、野外活動ボランティアの養成について考えていきます。

2. 子どもと野外活動（キャンプ）

健全育成活動のなかで行われる野外活動（キャンプ）の意義は、子どもの人間形成のために貢献することです。豊かな自然のなかで行われる共同生活には、子どもの成長発達に必要なものがたくさん含まれています。

野外活動（キャンプ）の意義を、現代を生きる子どもたちの成長発達のために重要な、“体験”という視点で考えてみます。

■自然体験（自然に親しみ理解を深める）■

豊かな自然のなかで活動しながら、自然の美しさ、すばらしさ、心地よさを感じ、また自然の厳しさや怖さをも体験します。自然と親しむ体験は、子どもたち



自然とともに、仲間とともに——それが野外活動（キャンプ）の魅力

の豊かな情操と感性をはぐくみ、また人と環境に対する理解を深める機会となります。

■生活体験（生活を豊かにする技術）■

野外活動（キャンプ）は、野外での素朴な生活体験ともいわれます。現代の便利な生活と違い、不便なことがたくさんあります。しかし素朴で不便な生活だからこそ、子どもが持っている知恵や力を生かせる場面がたくさんあります。野外での生活技術を学び、創意工夫を重ねながら、自分の健康と安全はどう守れば良いか、より楽しく、より便利に生活するにはどうすればよいかを、自分たちで考え実行できる創造的体験の場となります。

■社会体験（人と人とのかかわり方を学ぶ）■

さまざまな年齢や個性を持っている子どもたちが集まり、共同生活を送ります。新しい仲間と出会い、寝食をともにし、プログラム活動を楽しみながら、互いの理解と友情を深めます。活動をとおして、協力することや相手を思いやること、役割と責任、そして受け入れられる喜びや、互いを生かし合う大切さなど、人と人とのかかわり方を体験的に学ぶ機会となります。

■心の体験（自己理解と課題の達成）■

野外活動（キャンプ）では、さまざまな課題が待っています。自然のなかで、プログラムにチャレンジしてやりとげること、仲間と仲良くなること、また自分の力を発揮して仲間に認めてもらうことなど、それぞれの子どもたちに願いや課題があります。子どもたちが自分の願いを満足させ、活動をやりとげる体験そのものが、自分自身を見つめなおす機会となります。不安を乗り越え、課題を達成したときに、大きな喜びとともに、自分自身に対する新しい気づき、そして自信や自尊心を得ることができ、人生を豊かに生きる力をはぐくむことにつながります。

3. 児童館での野外活動（キャンプ）

地域の健全育成活動の中核を担う児童館でも、野外活動、とくに〈キャンプ〉は非常に意義のある活動となり得ます。“子どもを心身ともに健やかに育成する”ことを目的とした児童館にとって、現代の子どもたちが置かれている状況を考えたとき、野外活動（キャンプ）は児童の健全育成活動のための有効な手段の一つと考えられます。

野外活動（キャンプ）という自然体験、宿泊体験活動は、児童館という屋内中心の施設では、体験しにくい内容の活動です。児童館内ではふだん十分にできないことを補完し、さらに児童館活動の内容を充実させることにつながります。子どもたちにとっても、日常

の活動では体験できない、魅力的なプログラムとなります。

児童館の1年間の活動の流れのなかでも、大きなハイライトとなる活動です。毎年参加することによって、世話される立場から、上級生や班長となって世話する立場になったり、また学年が上がって、参加する野外活動が、低学年の活動から高学年の活動にステップアップするなど、子どもたちの成長の節目にもなります。

児童館での人間関係作りにも大いに役立ちます。野外活動（キャンプ）は、ふだんから気の合った児童館の仲間やクラブなどの固定されたがちなメンバーではなく、新しい人間関係での活動が中心となります。また、一つの児童館の活動としてだけではなく、放課後児童クラブを含めた複数の児童館合同の活動に広げると、子どもたちはふだんとは異なった、より広い人間関係を持つことができたり、より広い地域に交流を広げることができます。

野外活動（キャンプ）は、ふだんの活動に比べて、子どもたちが主役となる場面がたくさんあります。参加する子どもたち自身が、役割分担しながら計画や準備について話し合い、意見を出し合い運営をすすめることは、“子どもたちが意見を述べ参画する場”として、子どもが主体の意味のある活動となります。とくに中高生などの年長児童にとっては、野外活動の経験者として、また中高生ボランティアとして年下の子どもたちをサポートしたり、運営の大きな役割を担うなど、自分たちが中心となって活動を作り上げる場となります。

児童館の日常活動以上に、野外活動（キャンプ）は多くの人の協力が必要となります。子どもたちの活動や生活をサポートする兄や姉のような身近な存在の人、野外生活技術や自然観察を指導できる人、子どもの体調管理をする人など、できるだけさまざまな立場、知識や技術を持った地域の人々やボランティアの協力を得て、より良い活動にすることが望まれます。これは、“地域の健全育成の組織作り”や“地域のボランティアの育成”活動につながります。

以上のように、野外活動（キャンプ）は子どもたちが主役となり、また地域の人々との関係を広げるなど、児童館の活動を大きく広げることができます。

野外活動（キャンプ）とボランティア

1. ボランティアがもたらすもの

野外活動（キャンプ）では、子どもたちが日常の学校や放課後の生活や遊びのなかでは体験できない、自分自身の力で生活を営む体験や、ダイナミックな自然体験、仲間との集団生活や遊び体験をすることができます。

非日常的な体験だけに、日常の児童館事業にかかわるスタッフだけでは、安全で楽しい野外活動を運営することが、人的にも質的にも困難になります。プログラムの準備、生活面のサポート、安全管理など活動全般にわたって、子どもたちの生活を支えるスタッフが必要になります。だからこそ、野外活動ボランティアの存在が大きな意味をもってくるのです。

ここでは、野外活動にボランティアが参加することで得られる意味を考えてみたいと思います。

■子どもの安全を保障し、活動の質を向上する■

野外活動（キャンプ）では、子どもたちの安全をどのように保障するかが重要になってきます。せっかく自然のなかに出かけても、けがをしたり病気になったりしたら、子どもたちがそこでの体験をふりかえって自分自身の成長の糧としていくプロセスをゆがめたり、途切れさせてしまうおそれがあるからです。

野外炊事の場面をとっても、刃物や火、熱いものを扱うなど、さまざまなリスクが潜んでいます。見守る大人の目が少ないと、けがをさせないために、禁止事項が増えてしまい、子どもたちが新しい挑戦をする機会を奪うことになってしまいます。

子どもの生活場面でのサポートだけではなく、ハイキングなどの野外プログラムの場面でも、同じことが言えます。野外活動（キャンプ）のすべての場面において、子どもたちがダイナミックな自然体験、野外生



グループ(班)リーダーと一緒に、冒険へ出発！

活体験を行えるように、さりげなく子どもたちの安全を保障するボランティアの存在は重要です。

身体的な安全のみならず、心の安全を保障することも重要です。初めての場所、初めての体験の連続で流れ動く子どもたちの心は一様ではありません。一人ひとりに寄り添い、その声を聞くボランティアの存在は、野外活動（キャンプ）体験によって得られる子どもの内面の変化を、より豊かにしていく大きな力となります。

野外活動（キャンプ）のさまざまな場面で、ボランティアが運営のサポートをすることで、活動の質の向上につながると考えられます。

■野外活動プログラムを充実、深化させる■

ボランティアの大きな特性として、世代、職業、地域などの多様性があげられます。それは同時に、一人ひとりのボランティアが多種多様な特技、特性をもっていることを意味します。野外活動（キャンプ）に参加してもらう時、こうしたボランティアの力を最大限に活用することが重要になってきます。

野外炊事、キャンプファイヤー、ハイキングなどの野外活動の定番と言われているプログラムにこだわらず、スポーツ、クラフト、クッキングなど、ボランティアの持つ特技、特性をプログラムに生かしていくこともできます。ここで大切なのが、ボランティアとスタッフの関係です。

野外活動（キャンプ）はリスクの多い活動ですから、ボランティアの自由な発想を尊重しながら、スタッフの専門的な視点で、ボランティアが提案したプログラムを、子どもにとって安全で楽しいものになるようにコーディネートしていく必要があります。そのためには、ボランティアとの信頼関係を築いて、互いが納得できるプログラムを作り上げていく姿勢を忘れてはいけません。

ボランティアの独自性とスタッフの専門性が、対等の信頼関係のなかで掛け合わさることで、活動プログラムの充実、深化が期待されます。

■参加者の継続的参加を促す■

子どもたちにとって、野外活動（キャンプ）での班の仲間や大人との出会いは、とても印象深いものです。厳しい自然のなかで、大人も子どもも支え合いながら生活をしていきます。この支え合いの関係は、相手に対するいたわりの心や愛おしさ、やさしさが基本になって生まれてきます。

「大丈夫？」と言う問い合わせに対して、「ありがとう」

と言葉を返すことで、両者の間に親密さ、すなわちやしさしさや愛おしさを基盤とした関係が成立していきます。野外活動（キャンプ）では、こうした関係が成立する機会が、何度も訪れ、そのたびに子どもたちはより親密になっていきます。

子ども同士の関係が異年齢であった場合、年下の子どもが、年長の子どもや大人に対して親密さを深めていくなかで、あこがれや自分の将来的な人間像（モデル像）を重ね合わせるようになります。自分の年齢に近い、高校生や大学生の世代であれば、より明確なモデル像としてイメージできて、そこに至るまでの具

体的なプロセスを想像することができます。

ボランティアの存在意味は、技能や技術を生かすという視点だけでなく、存在そのもの、生き方そのものが、野外活動（キャンプ）の効果を高めると考えられます。

「ずっとキャンプに参加して、あの人みたいになりたい」と、初めて野外活動（キャンプ）に参加した小学生が、こうした感想をよく述べます。ボランティアがあこがれの存在となり、子どもたちの継続的な野外活動参加への意欲を醸成させると考えられます。

組織キャンプとは？

【子どもの城】では、野外活動（キャンプ）を〈組織キャンプ〉の形態で実施しています。公益社団法人日本キャンプ協会発行『キャンプ指導者入門』を参考に、〈組織キャンプ〉について、概略を紹介します。

組織キャンプとはなにかについての定義にはいろいろなものがありますが、関西の組織キャンプ研究会では次のようなわかりやすい定義をしています。

「組織キャンプとは、社会的に責任のある組織、団体が、何らかの教育的な意図、目的を掲げ、その目的が効果的に達成できるように十分な計画と準備を行い、計画から実施にいたるプロセスにおいて、キャンプの組織、責任、指導体制を明確にし、キャンパーの正しい把握と理解にもとづいて、プログラムを展開し、それら全てを統合して、よりよく機能しているキャンプのこと」。

（公益社団法人日本キャンプ協会『キャンプ指導者入門』より）

■組織キャンプの組織■

組織キャンプ（野外活動）では、野外活動の総責任者であるキャンプディレクター以下、プログラムディレクター、マネジメントディレクターなどの役割を担うスタッフが、組織として野外活動を運営します。

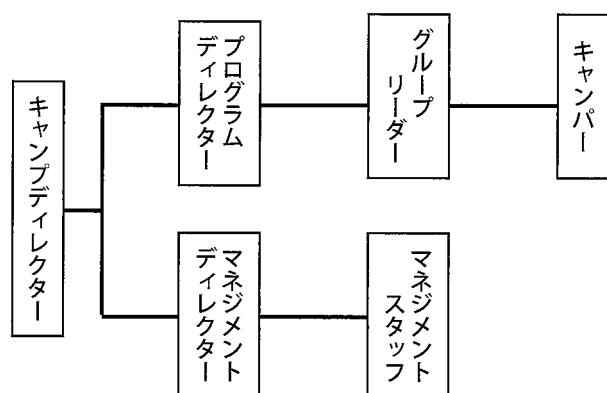
■指導者の役割■

指導者の役割は大きく2つに分けられます。一つは、キャンパーとともに生活しながらさまざまな援助を行うこと、もう一つはキャンプ（野外活動）全体がスムーズに進行できるように、準備・運営していくことです。それぞれの役割を説明します。

【キャンプディレクター】主催団体の社会的使命や運営方針に従い、キャンプの企画・実施における総責任者。キャンプの全てに対して最終的な責任を負います。

【プログラムディレクター】野外活動中に行われる活動の計画、実施の責任者であり、実際の指導についての指揮をとります。グループリーダーへの助言、指揮も行います。

○組織キャンプの組織図



【マネジメントディレクター】 プログラムディレクターと連携を取りながら、野外活動がスムーズに運営できるように、装備品、食事、輸送などの準備、管理を担っていきます。参加者だけでなく、スタッフ全員の安全や健康も含めて野外活動全体を支えていきます。

【マネジメントスタッフ】 マネジメントディレクターの指示の下に野外活動に必要な資材や装備品、食事、保健などの準備と管理をします。さまざまな作業や活動準備、設営など野外活動全体を表から裏からあらゆる場面で支えていきます。

【グループリーダー】 キャンパーと生活をともにし、安全と健康を守りながら、一人ひとりの成長をはぐくみます。そのなかで、キャンパー同士の豊かな人間関係がはぐくまれ、結果としてグループとキャンパー個人の成長に大きな影響を与えます。

【キャンパー】 キャンパーは小集団のグループを1つの班として構成します。班の人数は年齢によって多少異なりますが、6～8人で1つの班を構成することが多く見られます。

2. 野外活動（キャンプ）でのボランティアの役割

野外活動（キャンプ）と言っても、さまざまな種類や形態があります。何を目的にするかで、大きく2つに分けられると言われています。レクリエーションを主な目的とする野外活動と、何らかのねらいや目的を達成するための手段として野外活動を行う場合の2つです。後者は〈組織キャンプ〉と呼ばれ、[子どもの城]や多くの社会教育団体で実践しているものです。

■ [子どもの城] の野外活動におけるボランティア ■

[子どもの城] では、日本キャンプ協会が示す〈組織キャンプ〉の役割をアレンジし、それぞれのキャンプにあった組織作りをして、たくさんのボランティアに参加してもらっています。

キャンプディレクターのもとで、子どもたちに直接かかわる〈プログラム部門〉（プログラムディレクター／グループリーダー）と、〈マネジメント部門〉（マネジメントディレクター／マネジメントスタッフ）に分かれて組織的に野外活動（キャンプ）を運営します。

■ 具体的な役割～子どもたちに直接かかわる部門 ■

プログラム部門では、プログラムディレクターとグループリーダーの他に、〈ユニットディレクター〉を設けるキャンプもあります。

【グループリーダー】 キャンパーと生活をともにし、キャンパーの成長と安全を考えながらグループ作りを援助します。キャンプ前の対象理解やプログラム研究、野外活動中の記録、キャンプ後のグループ援助についてのふりかえりを行います。

【ユニットディレクター】 各グループの様子をよく観察し、グループリーダーを援助します。グループリーダーのまとめ役で、チームで取り組んでいきます。事前のグループリーダーのトレーニング計画、野外活動中のグループリーダーの援助、事後の役割についてのふりかえりを行います。

■ 具体的な役割～運営にかかわる部門 ■

マネジメント部門では、野外活動の形態（宿舎泊かテント泊か、食堂利用かどうか）や規模（子どもの参加人数、対象年齢）によって、役割分担の方法は違います。保健と記録以外は、役割を分けずにマネジメントスタッフとする場合と、役割を細分化してプログラム、物品、食事、記録、保健などの係に分担する場合があります。それぞれの係には、必ずまとめ役を1人おいて、チームで取り組んでいきます。

【プログラム係】

事前のプログラム計画、野外活動中のプログラム実

初めての野外炊事「うまく火がつくかな？」



施、実施後のプログラムについてのふりかえりを行います。

【物品係】

事前の物品準備、野外活動中の物品の管理、整理、実施後の清掃、片付けなどを行います。

【食事係】

事前のメニュー計画、レシピ作成、調理道具の割り出し、野外活動中の食材搬入、食材の管理、炊き出しの準備、実施後の食事についてのふりかえりを行います。

【記録係】

事前の機材の使用方法を確認、過去のビデオや写真から記録シーンの研究、野外活動中の記録、実施後のビデオ編集などを行います。

【保健係】

事前の保健物品の準備、野外活動中の健康チェックカード（参加者全員分の健康面を把握するカード）を見て、子どもの健康面に注意をはらいます。

【マネジメントスタッフチーフ】

マネジメントスタッフを細分化しない場合に設けます。マネジメントディレクターと連携をし、マネジメントスタッフの中心者としてマネジメントの活動（プログラム、物品、記録、保健）を推進していきます。

■ 事前の準備から事後のまとめまでの活動を担う ■

[子どもの城] では、野外活動当日だけではなく、事前の準備から実施、事後のまとめまでの一連の流れをとおしてボランティアがそれぞれの役割を担い、野外活動にかかわるようにしています。ボランティアの持っている力を生かすことを大事にしているからです。

野外活動が始まる2、3か月前ぐらい前から、事前のトレーニングや各役割ごとの準備を進めます。野外活動実施中も、活動をとおしたトレーニングや一日のふりかえり、記録をとるなどをします。実施後は役割ごとのふりかえりや個人のふりかえりをしています。

ボランティアを生かすスタッフのかかわり方

■計画的な運営■

打ち合わせやトレーニングの日程、内容をボランティア募集の前に計画しておきます。野外活動が、効率的かつ効果的に準備が進められるようになります。また、ボランティアと情報を共有するためにも、大切なものになります。ボランティアには事前に告知し、全日程の参加を条件に野外活動に参加してもらっています。

役割別の打ち合わせも行いますが、全体のスケジュールをにらみながら、ボランティアと一緒に日程調整を行い、計画をたてていきます。

ボランティアのなかには、「テントで寝るのは初めて」「野外活動は子どものころに林間学校で行ったきり」「組織キャンプという言葉を初めて知った」など、野外活動が初めてというメンバーもたくさんいます。事前から事後までの野外活動の流れや具体的な計画を知ることで、全体の見通しをたてることができ、初めてのボランティアでも、安心して野外活動運営に携わることができます。

■共通の基盤作り■

初回の打ち合わせでは、情報を共有することから始めます。年齢、性別、経験値、考え方、意欲などさまざまな特性を持った人が集まつくるので、野外活動に必要な情報を共有していくことが必要になります。

野外活動の目的や組織的な運営をしていくこと、組織の一員であることの理解、ボランティアの役割などの考え方を共有します。野外活動の目的や、何を大事にしたいのかなどが、はっきりとボランティアに伝わります。そうすることで、各役割ごとに準備活動を進めて、大きく逸脱することもなくなり、軌道修正することも可能になります。

組織の一員としてかかわることに慣れていない人も多いので、報告・連絡・相談をすること、各役割が連絡を密にすること、時にはトップダウンの決定もあることなどをルールとして伝えていくことも必要です。

情報を共有し、ボランティアとの共通の基盤を作つてからスタートできると、スムーズに準備活動に取り組めます。

■協働的な関係■

同じ目的に向かって取り組んでいくためには、良いパートナーシップの構築が必要です。

【意欲を大切に】

ボランティアは、「子どもと一緒に遊びたい」「こんなことに挑戦したい」「いいチームワークを作りたい」「理想のボランティアに近づきたい」など、さまざまな思いを持って参加してきます。その意欲は、人との関係のなかで現れるさまざまな障害によって、減退していくこと

もあります。その時には、スタッフのサポートが必要になります。

気軽に相談でき、自分の気持ちをわかってくれるスタッフの存在は大きいものです。一人ひとりの気持ちを大切にしながら、一人ひとりに合った接し方を心がけ、コミュニケーションをはかっています。誉めることや励まし、ちゃんとあなたのことを見ているという態度や行動などで、意欲を持続させ、さらに意欲をかきたてるようにしています。

【対等の立場で】

スタッフは、ボランティアとともに作るという姿勢でかかわっています。ボランティアに任せっきりにせず、一緒に考えながら準備を進めていきます。ボランティアが対等の立場で、自由に発言できる雰囲気作りをいつも心がけています。話し合いに参加しやすいように声をかけたり、話に耳を傾けたりしながら、ボランティアが自分の意見を安心して言うことができる、温かな雰囲気を作り出しています。

ボランティアの発言のなかには、目的に沿っていないものの、子どもの発達にそぐわないもの、子どもではなくボランティア自身が楽しいものなどがあります。その場合は、スタッフが軌道修正をしていきます。上からの押し付けではなく、発言したボランティアの気持ちに寄り添いながら、スタッフの意図を伝えていきます。

時には、意見がまとまらず、苦しむこともあります。そのときは、答えをすぐに出さず、一緒に考える姿勢が大事です。産みの苦しみを一緒に乗り越えていく体験で、ボランティアとの距離感を少しづつ縮めていくことができます。

【気持ちの共有】

ボランティアのなかに、いろいろな楽器を演奏できる人がいました。プログラムミーティングで、ゲーム中にBGMとして生演奏してもらつたらいいのでは、という意見がで、「それいいね～」「楽しそう」とみんなの意見が一致して、決定に至つたことがあります。野外活動中、子どもたちは生演奏のリズムにのって楽しそうにゲームに参加。演奏したボランティアや話し合いに参加していたボランティアと一緒に、「良かったね」と喜びを共有したことがあります。

スタッフとボランティアが、一緒に考えてきたことを実際に実行し、子どもたちが喜ぶ姿と一緒に見た時に、「喜んでくれてうれしい」という気持ちが共有できて、関係性をより深められた瞬間でした。

ボランティアのかかわり方が、当日の参加だけでなく、事前準備からの流れがあるからこそだと思います。

キャンプ 野外活動ボランティアの 養成事例～[子どもの城]の活動をとおして

「野外活動ボランティアの養成事例～[子どもの城]の活動をとおして」では、さまざまな野外活動のなかから、自然体験や生活体験などを総合的に体験できる〈キャンプ〉を中心に取り上げ、紹介します。

野外活動の事前トレーニング

準備活動にあわせて事前トレーニング

1. 事前トレーニングの目的

事前トレーニングには、野外活動や対象となる子どもを理解する理論や技術の研修と、ボランティア自身の参加意欲を高めチームワークの形成をはかる組織作りがあります。

野外活動の準備（プログラムの決定、用具や食材の準備など）は、2、3か月前から始まります。ボランティアにも準備活動の時点から参加してもらい、あわせてボランティアのトレーニングを行います。きたるべく野外活動に向けて、ボランティア一人ひとりだけではなく、キャンプを運営するチームとして、物心両面の準備が円滑に行えるように、気持ちをあわせていくのです。安全で楽しいキャンプを行ううえで、重要なポイントになります。

■事前トレーニングの目的■

【子どもの安全を保障する知識や技能の習得】

事前トレーニングのもっとも重要な目的は、子どもたちの野外活動をサポートし、その安全を保障するための知識と技術を、ボランティアがしっかりと身につけることです。

例えば、野菜の切り方やご飯の炊き方など生活を営むための技術、ナタでまきを割って火をつける技術、テントを建てるなど野外活動特有の技術、食中毒やけがの予防や処置などの救急法の知識や技術等々。野外で行われるさまざまな活動を、子どもたちがのびのびと不安なく体験できるよう“教える”“見守る”役割をボランティアが担うことになります。その基盤となる知識と技能の習得は重要です。

【子どもを理解する】

野外活動の主役である子どもを理解することも、大切なポイントです。参加する子どもたちについて、個人調査表、事前説明会での対面、保護者との面談から把握をしていきます。野外活動本番で子どもたちに、より的確なアプローチができるようになります。特にアレルギー体質など、体質面の把握は忘れてはならない事柄です。個人情報にかかるものなので、情報は慎重に取り扱います。

参加する子どもたち一人ひとりの理解とともに、発達の側面から見た子ども理解、現代社会の特質から見た子ども理解も必要です。さまざまな角度から子どもを理解することで、野外活動本番でどんな生活を送る

のか、どんな楽しみを共有するのかなどをイメージすることができます。

大人が子どもに接する時、子どもの気持ちやそれに伴う行動をイマジネーションすることはとても重要です。対象を理解することで、ボランティアの子どもに対するイマジネーション能力を向上させます。

【チームワークを築く】

野外活動に協力するボランティアの人数は、参加児童数、対象年齢、プログラム内容、フィールドなどの自然環境によって変わります。いずれの場合も、複数のグループで活動することが中心になってくるので、事前トレーニングを通じて、ボランティアグループのチームワークを形成するのも重要な目的です。

チームワークが形成されることによって、グループとしての機能や、個人個人のリーダーシップ機能が高まります。なかでも、補完機能を作り上げることが大切です。ボランティア間の相互作用が活発になり、互いを支えあう（助け合う）関係が生まれてきます。

初めて参加する人から経験者までがいるので、その技術、知識には大きな開きがあります。この経験や技術、知識の差を、ボランティア同士が補完しあうことで、野外活動の質が全体的に向上していきます。

【ボランティア自身の意欲を醸成する】

野外活動は、精神的に大きなストレスのかかる活動です。運営スタッフの多くがボランティアの場合、彼らが意欲的に野外活動の運営にかかわるかどうかが、事業成功の鍵を握ります。

もともとボランティア活動は、ボランティア個人の、その活動に対する興味、関心、使命感、達成感などによって成り立つものです。“やる気”や“積極性”、すなわち取り組む意欲が持続していくように、配慮することが大切です。

事前トレーニングを通じて、情報交換、意見交換を行い、スタッフとの信頼関係を培うと同時に、ボランティア同士の共同作業を通じてグループ意識、グループとしてのまとまりを高め、ボランティア一人ひとりの意欲が持続するように心がけます。

2. 事前トレーニングの概要とポイント

野外活動実施に向けて行う事前トレーニングは、「組織作り」「役割別準備活動」「現地トレーニング」の3つに分けられます。「組織作り」から始まって、実施直前まで「役割別準備活動」が続きます。その流れのなかに「現地トレーニング」が組み込まれ、全体として理論や技術の研修、チームワークの形成が行われます。

事前トレーニングは、独立したトレーニングとして特定の事柄を目的として行う場合もありますが、実施までのタイトなスケジュールのなかでは、十分な時間をとることが困難です。そこで、さまざまな準備活動をボランティアと共同して行いながら、準備活動そのものを事前トレーニングとして位置づけて行うようにしています。

■事前トレーニングの概要と運営のポイント■

【事前トレーニング①】

組織作り～チームワークの形成～】

野外活動の運営でボランティアが担う役割を決定し、「組織作り」を行います。事前トレーニングおよび、事前準備のスタートといえます。役割ごとに小人数のチームを編成し、チームを中心にさまざまな準備活動を行っていきます。

「組織作り」の留意点は、一人ひとりのボランティアの個性、特技、リーダーシップ、経験などを考慮して、その本人が目標を持って、意欲的に取り組める役割を与えることと、他のボランティアとの相互関係に着目した組織作りを行うことです。

【事前トレーニング②】

役割別準備活動～野外活動への“意欲”的形成～】

「役割別準備活動」は、野外活動の本番が始まる直前まで行われれます。用具の準備や制作、プログラムの相談・準備などです。

ボランティアは与えられた役割を基本にして、活動に取り組みます。「役割別準備活動」の留意点は、準備活動そのものがボランティアの事前トレーニングであり、しっかり取り組むことでよりよい野外活動運営が可能になることをしっかりと伝え、理解してもらうことです。ボランティア自身が準備活動の目的を明確に意識することで、より効果的なトレーニングが可能になります。

【事前トレーニング③】

現地トレーニング～チェック＆スキルアップ】

「現地トレーニング」は、実施までの役割別準備活動の途中に組み込んでいます。時期については、準備日程が半分くらい経過してから実施するのがいちばん望ましいと考えています。野外活動本番へのイメージや期待の高まり、ボランティア相互の人間関係の深まりなどが、ある程度確認できる段階のほうがより効果的なトレーニングが実施できます。

後半の準備活動に、ボランティアがより意欲的に取り組む節目として、「現地トレーニング」をとらえることも重要です。

事前トレーニング① 組織作り～チームワークの形成

1. スタッフとともに組織を作る

■野外活動の組織■

野外活動では、参加するボランティアが役割を分担して、野外活動の目的や規模にあわせて組織を作り、子どもたちをリードしながら、一緒に野外活動を進めていきます。参加するボランティアが野外活動の目的を理解し、それぞれの役割をふまえて準備を進め、当日の活動へ反映させていくことが大切です。

求められるのは効率だけではありません。ボランティア一人ひとりが役割を超えて目的を理解し、それを具体化する活動を立案・準備することです。どのような野外活動にしていくか、みんなでイメージを共有することが必要です。

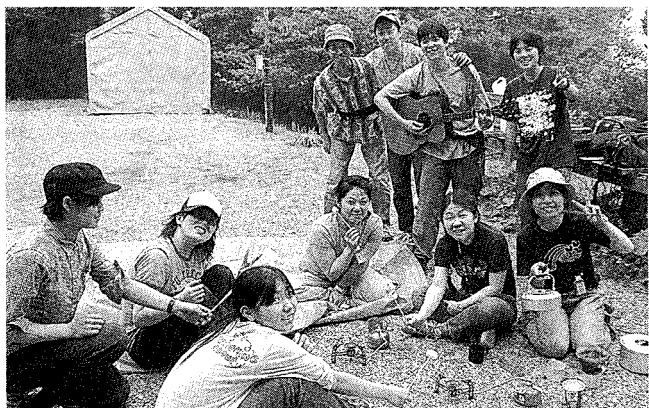
【組織を作る】

ボランティアは、スタッフとともに組織を作ります。中心となるメンバーは、経験の度合いなどを勘案して決めていきます。また、グループ全体を俯瞰して、経験の度合いやスキルの有無、メンバーのパーソナリティなどを考慮したうえで、個々の相性も考えて役割を決めていきます。

役割を割り振る際には、ボランティアそれぞれの得意分野だけでなく、苦手な分野にも挑戦する機会を作ることが必要なときがあります。「あの人に任せておけば大丈夫」と、いつも同じ役割になりがちですが、後輩の育成やマンネリからの脱却など、野外活動に新鮮な息吹を送り込むことも大切だからです。

別の経験を深めることは、新しい自分を作る一歩となるはずです。いろいろな経験を重ねて、多角的に見

“チームワーク”——それが野外活動(キャンプ)の要



ることができるようになると、野外活動への理解も深まります。

■新しいボランティアへの配慮■

準備段階での話し合いや作業から、多くのことを学んでいきます。子どもたちとの野外活動の経験が少ないボランティアには、組織キャンプの基本を理解することや、基礎的な技術を習得する機会をつくることも大切です。

〔子どもの城〕では、野外活動の基礎的な理論や技術の知識を得て理解を深めるために、準備活動と並行して、フォローアップ研修を実施しています。日本キャンプ協会の考え方に基づいて、〈レジャーキャンプ〉との違いを説明したうえで、〈組織キャンプ〉で大切な“組織をつくること”への理解を深めます。

キャンプ経験のあるボランティアは、話し合いを中心とした研修を行い、これまでの野外活動で感じたことや子どもとの活動についての体験談をもとに意見交換を行います。

野外活動の基礎的な知識

新しく野外活動へ参加するボランティアには、準備段階のトレーニング中に、基礎的な知識を伝えています。子どもたちと行う野外活動には目的があり、活動を通じてその目的を具体化していることを理解してもらいます。

【組織で行うキャンプとは?】

なぜ組織を組むのか？　野外活動の目的を達成するため、組織を作る必要性や意味、それぞれの役割分担などについて具体的に説明します。

【仲間のなかで育つこと～グループワークの大切さ】

野外活動の大きな目的の一つである仲間作りや、

仲間意識を深めることの意味を理解し、それを援助することが大切であることを伝えます。

【キャンプの技術】

火や刃物の使い方、ロープワーク、テントの扱い方、山歩き・クラフトなどの野外プログラムをはじめ、さまざまな技術が必要であることを紹介します。

【応急救護の技術と安全】

病気やけがへの処置対応のみならず、他の子どもたちの安全を確保する、指導者の体制の大切さを伝えます。ふだんから安全で健康な生活を維持することの大切さを伝えます。

2. 互いを知るワークショップ

〈組織キャンプ〉を実施するには、運営するスタッフのチームワークを作り上げることが大切です。参加する子どもたちには、「仲間」を感じ、その大きさを理解し、互いに協力することを経験するプログラムを実施します。もちろん、スタッフとボランティアをあわせた指導者側は、手本となって仲間理解＝チームワークを示せなければなりません。

指導者集団としてのチームワークを作り上げ、深めることはもちろん、チームワーク作りの技法を理解するために、ワークショップを実施しています。

■話し合いから互いを知る

～考え方を知り、新しい活動を生み出す～

それぞれのボランティアが、今までの経験や野外活動での事例を通じて意見を交換することで、互いの考え方を知ったり、活動中の課題への対処方法などを考えます。さらに、ブレーンストーミングなどの話し合いを行うなかで、野外活動の新しいプログラムを生み出したり、実際のプログラムを立案したりする機会にもなります。

【プログラム例～話し合いのテーマ】

「子どもに接する時に一番大切にしたいことを話し合おう」「グループアクティビティ（野外活動プログラム）でやってみたいことを考えよう」などのテーマを設定し、同じ活動へ取り組むボランティア同士で話し合います。

経験している活動の回数や年数、内容なども異なるなかで、互いの経験やそこで得た価値観などを伝え合い、共有していきます。話し合いをとおして、それぞれの考え方や思いを知りチームワークを深めていきます。話し合いの結果は、プログラムの立案や具体的な内容に反映させていくこともあります。

話し合いの手法としては、個々のアイデアなどを短冊状の紙にメモしていく、互いに発表し合ってまとめていく方法、大きな模造紙などに考えたことを書きとめてまとめていく方法などをとっています。

小グループ（5～8人程度）に分れて、互いが話しやすく発表しやすい形式で行い、全員が能動的に参加できるような機会をつくることが大切です。大きな集団のなかでは言えないことでも、小グループに分かれて話し合うようにすることで、発言しやすくなります。また、発言の機会も増え、互いの意見も聞きやすく、また身近に感じることができます。

全体をまとめ手法としては、大切にしたいことなどを「大切にしたいことランキング」にまとめたり、「○

○の五か条」のようにまとめることで、内容を深めて考えることにつなげることができます。

■実習をとおして“課題達成”を体験

～子どもたちのグループワークから学ぶ～

事前の準備活動やトレーニングキャンプなどの野外活動のなかでも、実習として行うと効果的なプログラムです。子どもたちが野外活動で体験するプログラムを理解するとともに、実際に体験することでボランティア相互の関係を深め、チームワークを深めます。

【プログラム例①～ラインナップ】

低い平均台や丸太など、全員が乗れる台を用意します。6～8人程度のグループに分かれ、全員がランダムに台の上に乘ります。

リーダーが並び順を指示して、台の上から落ちないように互いを支えながら、指示どおりの順番に並び替わります。互いに声をかけ合い、入れ替わるアイデアを出したり、入れ替わる人を支えるなどの連携した動きが必要な、課題達成型のプログラムです。

互いの身体接触があるので、名札やポケットにあるものは置いてから始めます。リーダーは参加者が落ちてけがをしないように、近くで見守り、必要に応じて安全を確保します。

終了後は、達成感を共有するなかで感想を述べ合い、どれだけグループへ参加できたか、自分の思っていることを他者へ伝えられたかなどをふりかえります。

【プログラム例②～エレキトリカルフェンス】

4～5mほど離れている、2本の立木の高さ1～1.2mくらいのところに、ビニールひもなどをはります。このひもを電流の通ったフェンスに見立てて、触れないようにして越えて、反対側へ移動します。触れてしまったら最初からやり直しとなります。

どのように越えるかをグループで話し合い、みんなでアイデアを出し合います。誰か一人の案で強引に進めないように指導します。互いに支え合い、最初の地点に1人も残さないように越えていきます。

越える方法は自由。グループで考え、声をかけながら、それぞれの役割をはたしながら、協力して達成します。達成後は、感想を述べ合い、どれだけグループへ参加できたか、自分の思っていることを他者へ伝えられたかなどをふりかえります。

事前トレーニング② 役割別準備活動

1. 参加意欲を高める

■実施に向けた野外活動の打合せ・準備活動■

実施する野外活動のねらいや骨格などを作る話し合いを受けて、役割ごとに具体的な活動計画を企画・準備していきます。ボランティアも、それぞれの役割に分かれ準備を進めます。同じ役割のボランティア同士が互いの考えを知り、思いを共感していくよい機会となり、野外活動全体への理解を深めています。

野外活動を成功させるためには、指導する側のスタッフ・ボランティアのチームワークが大切です。役割ごとに少人数で行う活動は、メンバー間の意思疎通を活性化します。情報も共有化できるようになり、互いにカバーしあうこともできるようになります。

また、初めて参加するボランティアも、経験者とチームを組むことで、安心して活動に取り組むことができます。自分の役割を中心に、野外活動全体を感じながら、積極的に参加していくことができます。

■役割別準備活動から学ぶこと■

【経験者からの継承】

〈組織キャンプ〉では、それぞれの役割ごとに準備を進めていくので、自分の役割の視点に立って、より深く野外活動を考える機会となります。

役割ごとのチームには経験者を入れるようにし、前回までの流れや取り組み方、苦労話などが継承できるようにしています。経験者は、他の人に伝えるために経験などを整理しなければなりません。これまでの活動を改めて見直すことで、さらに理解を深めたり、新しい視点で物事をとらえたりすることになり、新たな成長が期待できます。

新たに参加した人たちには、活動をとおした学びとなります。経験者が少ない場合には、資料などで調べたり、チームと一緒に考えて活動を続けています。

【活動への理解を深め、参加意欲を高める】

それぞれの野外活動には、これまでに培ってきたねらいや、大切にしている事柄が必ずあります。子どもたちに対する具体的な行動（働きかけ）などを、担当する役割のなかでどう具体化していくかを、過去の例などを参考に話し合い、よりよい活動へつなげていくことが大切です。

野外活動全体への理解を深めることで、「何をしてよいか分からない」という不安が消えて、リーダーとしての参加意欲（やる気）を高めることにつながります

す。“やる気”が「さらなる向上心」を生み出し、よりよい活動をつくっていくことにつながります。

【共通理解がチームワークをつくり、深める】

経験の異なるメンバーが教え合い、話し合うことで、互いを理解していきます。その過程をとおして、ボランティアの参加意欲が高まっていきます。

相互理解が深まると、“互いに言いたいことを言い合える仲”が作られています。若い世代の人たちは、“上辺だけの付き合い”が多く、人との関係が作りにくいと言われますが、このような活動をとおして、コミュニケーションの能力を高めていきます。将来、さまざまな世代とかかわりを持って、地域社会を作っていく場合にも役立ちます。

互いを認め合うようになると、チームワークが高まり、グループの士気も高まります。心強い仲間ができるため、安心・安定した活動となり、自由に話し合えるようになり、アイデアの幅も広がっていきます。“やる気”は、野外活動の技術の面でも、一人ひとりの学習意欲や能力を高めることを意味し、より深い理解、高度な技術を求める探究心にもつながっています。

2. 役割別準備活動のポイント

準備活動は、それぞれの役割に分かれ、各役割ごとに具体的に進めていきます。

■グループ(班)リーダー■

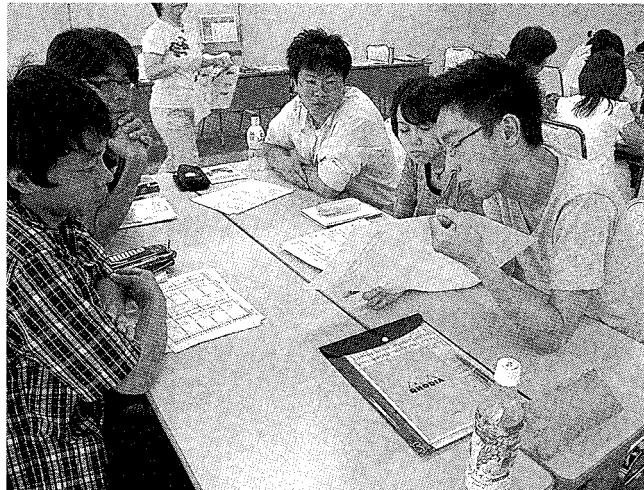
子どもたちと一緒に生活し、行動を支援します。子どものグループの担当です。子どもたちと行動することが多いため、個々で活動している印象があります。

グループ運営に対応する技術を中心に、野外活動の技術などが求められるように思われがちですが、技術的な事項は、必要な技術を持つスタッフ・ボランティアでカバーすることができます。いちばん大切なこと



事前の準備が子どもたちの笑顔につながります

子どもの課題を話し合いながらプログラムを作成します



は、グループリーダーが、他のリーダーと連携できる関係を作り出していくことです。

【子どもを理解する活動】

子どもたちへのかかわり方、年齢による発達段階の理解、個々の子どもの理解など、野外活動を実施する上で、事前に理解しておくことは大切です。そのため、グループワークを通じた援助法などを学習する機会を用意します。

保護者に提出してもらった個人票（ふだんの様子や既往症など、生活面の配慮事項などを記入）などを確認し、参加する子どもたちへの理解を深めておくことが必要です。経験者からのアドバイスに合わせて、ともに学習したり、教え合ったり、文献を調べるなどの準備をします。

◆トレーニングのための話し合いのテーマ例◆

- 子どものときに、何をして遊びましたか？

【グループ別活動での取り組み】

野外活動の生活の基本となるのが、グループ(班)です。子どもたちは、仲間との生活をとおしてメンバーとの関係を作り、深めていきます。初めて出会った子どもたちも、子ども同士で関係を作り、深めていくことはできますが、グループ(班)リーダーのボランティアがかかわることで、より早く子ども同士の関係を深めていくことができるはずです。

子どもを理解し、グループワークの技術などを活用していきます。経験者から過去の事例や活動の様子などを聞いて、自分なりに活動を考え、子どもたちの要望に応えて、よりよい活動とする必要があります。

◆トレーニングのための話し合いのテーマ例◆

- グループの活動時間はどんなことして遊ぼうか？

【協同生活での留意点の確認】

活動の進め方や子どもたちへの対応（注意すべきこと・規則など）など、全体で共有しておかなければな

らない事項について確認するとともに、その意味や必要性について確かめておきます。

また、1日目の出発時から最終日の解散時までの行動を、経験者から具体的に聞いて整理し、本番のときの子どもたちの行動をイメージしてみることなども、有効なトレーニングの一つです。具体的な行動をイメージすることで、留意事項のポイントが把握しやすくなります。

◆トレーニングのための話し合いのテーマ例◆

- 子どもたちへ接する時に何を一番大切にしますか？
- 子どもたちを注意する時の留意点は？
- グループリーダーとして大切なことを話し合ってみよう！

■マネジメントスタッフほか■

野外活動全体を把握し、総合的に準備・運営していくのが、マネジメントスタッフのボランティアです。

グループ(班)リーダーが子どもの身近な存在であることに対して、マネジメントスタッフは、子どもたちを見守り、側面からサポートする“後方支援スタッフ”と言えます。資材や装備品、食事、保険などの準備と管理を担当します。

ときにはグループ(班)になじめない子や浮いている子などに働きかけて、もう一つの居場所となって本部で受け入れたり、少し距離をとってからまたグループへ帰るように働きかけをすることもあります。参加する子どもたちの健康や安全だけではなく、さまざまな側面から支えていくことも大切な役割です。

◆トレーニングのための話し合いのテーマ例◆

- グループになじめない子に対して、できることはなんだろう？

【全体活動のプログラム作り】

野外活動のプログラムは、グループ(班)別のプログラムと、参加者全員で行う全体プログラムに分けられます。野外活動全体の流れを考えながら、効果的に活動が展開できるようにプログラムを考えるのも、マネジメントスタッフの役割の一つです。

野外活動では、まず互いを知り仲間の絆を作ることに重点を置いたプログラムを行い、その後に参加者が互いに関係を深め、自然を楽しみ、話し合いながら自分たちの考えた活動を実現するようにします。活動が終わりに近づくにつれて、達成感の共有や同じグループで活動できたことへの充実感を大切にします。

野外活動のねらいを達成し、その効果を最大限に引き出すために、マネジメントスタッフは全体の流れを把握しつつ、それぞれの全体活動のプログラムを企画・立案することが求められます。

事前トレーニング③ 現地トレーニング

1. 3つの目的

野外活動に取り組むボランティアの事前トレーニングプログラムの一つとして、「現地トレーニング」があります。野外活動を行う場所で、プログラムを運営しながら、実施に向けてさまざまなことを体験的に学ぶ機会です。

■使用するフィールドと施設の確認■

使用する施設の規模や位置関係を把握し、子どもや組織の動きを想定しながら準備することは、活動の安全を確保する点からも、また子どもたちの「こうしたい！」という思いに応えるためにも必要です。また、スタッフとボランティアが、活動するフィールドの情報を共有することは、プログラム作りの際にも役立ちます。

経験者にとっては、本人の野外活動技術とフィールドを照らし合わせることで、新たなプログラムを創造するきっかけにもなります。また、初めて参加するボランティアにとっては、どのような場所なのかを知るだけでも大きな意味があり、参加するボランティアの安心につながります。

■野外活動技術を磨き、指導方法を確認■

現地で事前トレーニングを行うことが、困難な場合もあります。その場合は、現地を想定した環境のもとでトレーニングを実践します。

テント設営・炊事などの野外活動技術を磨くことも、重要なトレーニングの一つです。ボランティア全体のスキルアップにつながり、自信を持って子どもたちと生活を送ることができるようになります。

スタッフとボランティアが、指導方法や援助方法を確認しあい、統一していきます。例えば、効果的な安全管理・安全指導を多くのボランティアとともに検討することは、参加する子どもへのリスクを軽減することにもつながります。

■プログラムのシミュレーション■

実際に使うプログラムを体験することで、事前に効果測定などを行うことができます。計画したプログラムは果たして効果があるのか、どのようにしたらより効果を発揮できるのかは、実際に体験し、フィードバックを行って初めて気づくこともあります。実際に使うことで思わぬ落とし穴に気づかされることもあります。また、登山プログラムなどでは、休憩・昼食のポイント・悪天候時の避難方法などを確認します。

野外活動を運営するボランティアには、さまざまな役割があります。現地トレーニング中も、運営組織を意識しながら活動することで、それぞれの役割について体験を通じて考えていくことも、重要なシミュレーションの一つです。

2. トレーニングのポイント

3つの目的を基本に、現地トレーニングのプログラムを組み立てていきます。経験者にも、初参加のメンバーにも効果的なトレーニングを行うために、以下のポイントを大切にしています。

■さまざまなアクティビティに挑戦■

現地トレーニングは、実際に使うプログラムのシミュレーションに終始するのではなく、さまざまなアクティビティ（野外活動プログラム）に挑戦することも大切です。ボランティア自身が野外活動の楽しさや自然の魅力を感じ、それを子どもたちに伝えることが大切だからです。

スタッフやボランティアは、子どもたちの奔放な創造力を受け入れ、発揮させます。そのために、さまざまな経験に基づいた野外活動への自信が重要です。また、どんなにシミュレーションを重ねても、天候や子どもの様子などで、予定どおりには進まないこともあります。さまざまなハプニングへの対処に備えるためにも、いろいろなことに挑戦しておきます。

現地トレーニングでは、ボランティアの野外活動への興味関心を高め、経験の幅を広げていくことが重要なポイントになります。

■互いの信頼関係を築く■

野外活動の運営には、チームワークが重要です。現地トレーニングでは、各種プログラムを実施するだけではなく、寝食をともにします。共通の体験は、相互理解をより深めるきっかけになります。

また、登山や冒険プログラムのトレーニングでは、みんなが協力し、声を掛け合い、ともに乗り越えていく経験をします。その結果、互いの信頼関係が築かれていきます。現地トレーニングのプログラム自体も、ボランティアのグループワークの一環としてとらえることが大切です。

3. 実地調査のポイント

野外活動を行う際に必要な準備活動の一つとして、実地調査（フィールドチェック）があります。その目

的は大きく分けて2つあります。

一つは、参加者（子ども・ボランティア）にとって安全な環境を確保すること、もう一つは実施する予定のプログラムが実施可能か否かを判断することです。

実地調査は、現地トレーニングの基礎的な部分で、

野外活動プログラムを実施する上で、不可欠な準備です。実地調査は、全てボランティアとともに行う必要はありません。ボランティアの事前準備に必要な情報と照らし合わせたり、実施当日に子どもたちとかかわる場所を中心に、確認していきます。

	共に確認すべき事項	必要に応じて確認すべき事項	留意事項
自然・環境	危険の潜む地理的環境（水辺・崖・急斜面・危険区域など）／ハイキング・登山コースなどのルート（地形・所要時間など）	実施場所の環境（標高・気候・気温・風向きなど）／おすすめスポット（景色の良い場所・展望台など）／人間に危害をおよぼす恐れのある生物・植物	野外活動には、多くのハザード（危険要因）があります。命の危険につながるような環境に対しては、何らかの対策を施し、場合によっては回避する必要があります。周辺を散策して調査したり、施設職員や近隣の住民にたずね、危険を把握します。また、野外活動実施日が実地調査時から間があいてしまうと、環境の変化にともなってハザードが変化します。実地調査を行う時期は、実施当日からさかのぼって、1か月ほど前に行います。
施設（屋外施設）	テントサイト（場所・配置・広さ）／本部（場所・広さ）／トイレ（場所・数の確認）／炊事場（場所・位置・蛇口の数・調理場の有無）／灰捨て場の位置・屋根の有無）／プログラムの実施場所（場所・規模・地形）	ファイヤーサークルの有無（場所・広さ・灰捨て場の位置）／集いの広場の有無（場所・広さ）／シャワー設備の有無（シャワーの数・石鹼などの有無・利用可能時間）／屋外照明の有無（場所・明るさ・スイッチの位置）／コンセントの使用の可否（場所・コンセントの口数・ワット数）	施設によって、実施可能なプログラム内容が変わってきます。検討したプログラムが実施可能か確認します。実施場所の位置関係を確認し、移動時間を把握することも計画を立てる際に必要です。使用するテントサイトのみならず、施設全体の位置関係もあわせて確認します。
施設（屋内施設）	宿泊室の確認（室内の様子・設備・清掃方法）／浴室の有無（シャワーの数・石鹼などの有無・利用可能時間）／荒天時の避難場所の有無（場所・収容人数）／移動ルートの確認	起床時間・消灯時間・空調停止時間／キャンドルファイヤー実施の可否（設備・収容人数・利用可能時間）／集会室の有無（広さ・収容人数）／食堂の有無（広さ・座席数・利用可能時間）／売店の有無（主な購買品の調査）	野外活動とはいえ、宿泊・食事は屋内設備を用いることは多々あります。食堂や浴室に限らず、荒天時は他団体と設備を共有することがあるので、それを踏まえて計画を立てることも大切です。
物品・その他	借用可能物品の確認（必要物品の個数確認・貸出方法）／物品保管方法の確認（場所・広さ）	利用可能な設備の確認（冷蔵庫・洗濯機・公衆電話など）／食料調達の方法（調達方法・配達時間・販売店の確認）／救急体制の確認（近隣病院の確認・消防や警察を含む）／携帯電話の送受信状況	病院などとの打ち合せは、スタッフで行うほうが効率的ですが、救急体制や連絡方法については、ボランティアと情報を共有しておくことが大切です。
人		施設担当者の確認（宿泊・食事・物品貸出）／専門指導者の有無（施設職員・その他指導者・山岳会など）	現地スタッフや地域の人に、指導者としてプログラムを依頼する場合、現地トレーニングでも実施当日と同じように指導してもらえば、プログラムのイメージを明確にすることができます。トレーニングの一環として、指導者にボランティアに向けたミニレクチャーを依頼するなど、専門家の生の声をボランティアに届けることも、意味のある活動になります。また、実施当日に行う施設スタッフとのやりとりも、トレーニング中にボランティアが行うことで、その方法を確認しておくことができます。

現地トレーニングのプログラム例

現地トレーニングのプログラムは、必ずしも実際の野外活動で実施する内容と同じである必要はありません。野外活動を滞りなく実行することも大切ですが、子どもたちにとって魅力的なボランティアとは、野外活動の魅力を語ることができる人です。そのために、野外活動にかかる大人はすべて、多方面にわたる知識を身に付け、経験を積むことで、自らの野外活動の幅を広げていくことが必要です。

■単独野外炊事～ひとりができるもん！～■

テーマ：野外炊事に必要な技術を習得する／必要最低限の物品・食材・時間で、アイデアを生かした食事を作る

参加ボランティア：13人

準備するもの：飯ごう（人数分）／米（1人1合）／マッチ（1人3本）／食費（1人500円程度）

プログラムの進行：右表とおり

方法：今回は一人で野外炊事を行うことで、気づかぬうちに他のメンバーに補われている技術を再確認します。ほかのメンバーのサポートを受けることは不可。ただ単に技術を学ぶ機会とするだけではなく、“遊び心”をもって実施することで、参加ボランティアも意欲的に取り組み、アレンジやチャレンジの面でも力を発揮できます。



一つひとつの技術を楽しみながら再チェック

時間	内 容
0:00	<p>□目的の確認□</p> <p>野外炊事に必要な「飯ごうによる炊事の技術」を習得する。薪組みの方法・マッチの使い方・飯ごうの使い方など、野外炊事の技術の習得をめざす。</p> <p>さらに、必要最低限の物品・時間で、自分で食材を購入し、簡単かつアイデアを生かしたおかず作り。既に野外炊事の技術を十分に身につけている人は、それを生かし、手の込んだオリジナルメニューを作る。</p>
0:15	<p>□食材の購入□</p> <p>一旦解散し、各自、近隣のスーパーマーケットなどで食材を購入。予算は500円以内、購入するものは自由。近隣にそのような施設が無い場合は、あらかじめ購入した食材をメンバーが必要な分だけ分け合っても良い。</p>
0:35	<p>□野外炊事開始□</p> <p>飯ごうを使った料理作り。焼きつけに使うマッチ3本のみ。薪の代わりに、枝を拾ってきて火をおこし。買って来た食材でおかずも調理。</p> <p>=メニュー例=</p> <p>〈ビビンバ〉ひき肉100g、醤油大さじ2、砂糖少々、味噌少々を混ぜ、火にかけて軽く混ぜる。最後に炊いたご飯に混ぜて食べる。</p> <p>〈ちゃんちゃん焼き〉春雨をゆで、鰯の味噌煮缶、カット野菜、酒、味噌を入れて煮込む。</p> <p>〈ピーマンとれんこんのピラフ〉ピーマン、醤油、オリーブオイルを、ご飯と一緒に炊く。水加減は通常時と同様。レンコンは後からご飯に混ぜる。最後に塩、こしょうで味付け。</p> <p>〈ジャーマンポテト〉じゃがいも、玉ねぎの薄切り、チーズ、オリーブオイル、塩、こしょうをアルミホイルで包む。それを濡らした新聞紙で包み、再度アルミホイルで包んでから直火に入れる。新聞が乾いたら完成。</p>
1:15	<p>□食事□</p>
1:35	<p>□集合・活動のふりかえり□</p> <p>集合し、それぞれのメニューとレシピを互いに報告し合う。また、「野外炊事の際にやって良かった工夫」「やってみて気付いたこと」を発表し合う。</p> <p>〈工夫したことの一例〉</p> <p>薪が濡れていたので、ナイフでさくくれを作つて燃えやすくした／薪を二つに折つて、折った所から燃やすと燃えやすい／薪を組む時は、安定した薪を左右に置いて、その上に組むと崩れにくい。</p> <p>〈気付いたことの一例〉</p> <p>軽い枝の方がよく燃えた／薪はきちんと組み上げてから火を点けた方が効率的／ご飯が炊けたのは、大体15分前後だった。／飯ごうは、水が吹きこぼれると聞いたが、吹きこぼれないで炊けることもある。</p>
2:00	<p>□終了□</p>

■みんなでつくろう！〈スノーシアター〉■

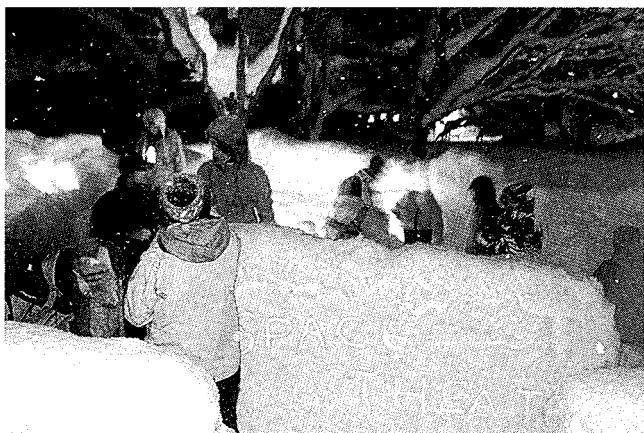
テーマ：共同体験や意見交換をとおして、達成感を味わい相互理解を深める／雪の特性や用具の使用方法を身につけ、プログラムのシミュレーションの機会とする

参加ボランティア：18人

準備するもの：模造紙2枚／マジック2セット／スコップ・バケツ・スノーソーなど、雪の造形物の製作に必要な物品／ジッップロック（大：設計図などを入れる。防水のため）

プログラムの進行：右表とおり

方法：雪で作られた劇場〈スノーシアター〉を皆で作る。劇場には座席と舞台、それを取り囲む壁を作る。劇場を作ったら、そこで1時間30分程度のプログラムを行い、楽しい時間を過す。開演時間は夜なので、ろうそくの炎でライトアップすることも必要。実際の野外活動では行う予定はないが、雪上プログラムのスキルアップや、新しいプログラムの開発の機会となることを期待。



完成間近！ろうそくの灯が劇場をつつみます

時間	内 容
0:00	□目的の確認□ 共同製作によるチームワークや、達成感を味わうことが目的。メンバー間の相互理解を深める。
0:10	□建設予定地の決定□ どの場所に〈スノーシアター〉を作るのか皆で検討。全員が座ることのできる平坦な土地で、自然に囲まれた場所を選ぶと良い。全員で確認することで、同じ情報を共有する。
0:40	□企画会議1（テーマの決定）□ 全体のテーマを決定する。劇場の外観だけでなく、演目やそのほかのさまざまな場面で、そのテーマを生かす。
1:40	□企画会議2（設計と企画）□ 「設計チーム」と「企画チーム」に分かれる。 「設計チーム」は劇場の外観と製作物、製作手順を検討する。 外観を簡単な図面にして、メンバーに伝える。 「企画チーム」は、どのような内容のプログラムを実施するか、検討。自分たちだけでなく、小グループに分かれて寸劇などの出し物を検討してもらうことも可。
2:30	□チーム会議の内容発表□ 話し合った内容を模造紙にまとめ、発表。
2:40	□〈スノーシアター〉の製作□ 「設計チーム」の指示のもと、全員で製作。図面は大判のジップロックなどに入れておくと、濡れても安心。外での作業になるので、適宜休憩を取りながら活動する。
7:30	□〈スノーシアター〉会場準備□ 全員でろうそくに明かりを灯したり、その他最後の準備作業。
8:00	□〈スノーシアター開演〉□ 「企画チーム」の司会で進行。プログラムが始まる。天候によるが、夜間の屋外での活動になるので、1時間～1時間30分程度にする。
9:30	□活動のふりかえり□ 会議から製作、公演までのプロセスを経て、それぞれが感じたことを発表。また、「実際に子どもたちとこのプログラムを行うとしたら」という視点でふりかえることで、プログラムを検討する際の留意点を皆で確認する。 =発表の一例= 0から話し合い、それが形になることは、とてもおもしろかった／「できたら良いな」が形になると「がんばればできるんだ！」と思える／作業を分担して製作し、それが最後に1つになるのはうれしい／逆に、最初に共通のイメージが持っているか否かが重要なだろう／全体としての満足感は高いが、個々人が同じように満足できるかは疑問／自分の役割が分からなくなる瞬間がある。しかし、分かってくると楽しい／子どもと一緒に使う場合、子どものモチベーションの維持が課題。
10:30	□終了□

野外活動実施中のトレーニング

実際の活動をとおして学ぶ

1. 実体験をとおして学ぶ

準備活動が終わり、いよいよ野外活動本番が始まります。ボランティアは大自然のなか、子どもたちとさまざまな活動を繰り広げていきます。事前トレーニングでの成果がまさに試される時です。

野外活動ボランティアのトレーニングは、実際の活動場面でも継続して行われています。OJT(On-the-Job Training)の手法を用いて、主にスタッフを中心となって、野外活動の具体的な知識や技術、ボランティアとしての言動や態度などを指導、助言していきます。子どもたちの活動が実際に行われているなかでのOJTは、事前のトレーニングでは得られない学びや効果があります。

■野外活動実施中のトレーニングの意義■

【“今ここで”の学びがある】

子どもたちとの野外活動をとおして、ボランティアはさまざまな体験を積み重ねていきます。その体験は、ボランティア自身の“今ここで”的感情に裏打ちされたものです。喜び、悲しみ、くやしさ、楽しさなど、実体験をとおして得られる感情は、そこでの発見や学びをより深化させます。

野外活動におけるOJTは、実際に体験したことをふりかえり、そのなかから成果や課題を発見するプロセスをとおして行われます。それは同時に、その時々のボランティア自身の感情もふりかえることになります。「なぜそんなにくやしいのか」「どうしてうれしいのか」という感情を、ボランティアが改めて見つめ直すことで、そこで気づいた成果や課題が確実な学びとして刻まれていきます。特に課題の発見は、その時の感情が生々しく思い起こせる時間経過のなかで行ったほうが、より深く意味のあるものになります。

【心のケア】

肉体的精神的にストレスのかかる野外活動では、ボランティアの心のケアはとても重要です。特に子どもと直接接するグループリーダーは、日中は“気の休ま

る暇がない”状態が続きます。

ボランティアが子どもから離れ、スタッフや仲間のボランティアと話することで、このストレスを解消し、精神的な安定感をもたらします。特にボランティア同士で話することは、ボランティア間の相互関係も深まり、活動意欲を持続させる効果を生み出します。

2. トレーニングの概要と運営ポイント

野外活動中に使うトレーニングは、〈1日のふりかえり〉と〈記録〉に大別できます。前者は、野外活動中に使う毎日のふりかえりです。野外活動プログラムの一部として組み込み、主に子どもたちが就寝した後に行います。組織全体で行うものと、ボランティア個人個人がスタッフあるいはボランティアと行う個人レベルのものがあります。

後者の〈記録〉は、グループリーダーが担当します。担当グループの子どもたちの様子を記録するとともに、個人レベルの〈ふりかえり〉の内容を記録します。この〈記録〉は、野外活動終了後のトレーニングにも生かされます。

運営のポイントとしては次のことが上げられます。

■計画的かつ臨機応変な運営をめざす■

野外活動中のトレーニングは、限られた時間のなかで実施しなければなりません。プログラム全体を見通



子どもの体も心も受けとめます

今日をふりかえり、明日を思う“夜のひととき”



したうえで、計画的に実施することが必要です。

【どの時間帯に行うのが効果的か】

トレーニングの目的によって、活動スケジュールのどの位置に組み込むのが、いちばん効果的かを考えます。〈1日のふりかえり〉を中心としたものならば、すべてのプログラムが終了した時間帯が効果的ですし、〈プログラムごとのふりかえり〉ならば、そのプログラムの終了後すぐに行うのが効果的です。とは言っても、全体のスケジュールもあるので、時間帯を調整します。

【定刻に始まり、定刻に終わる】

予定した時間どおりに始まり、終わることは、ボランティアの意欲を持続させる大きな要因になります。特に精神的、肉体的に消耗の激しい野外活動では、ボランティアの睡眠時間や休憩時間をしっかり確保することがとても大切です。

〈1日のふりかえり〉は、毎日の運営の節目にもなります。節目となるプログラムが計画通りに実施されることは、組織運営が正常に行われているかどうかの目安にもなります。

【臨機応変な運営】

野外活動は天候、子どもの状態、ボランティアの状態などさまざまなことがらが絡み合って、予定どおりにいかないことが、しばしばあります。活動中に行うトレーニングは、全体運営の状況に合わせながら、時間、内容、方法を柔軟に変化させながら実施していく必要があります。

■ボランティアの状態を把握する■

ボランティアの肉体的な疲労度や、精神的な疲労度を把握しておくことが大切です。疲労が激しいと、トレーニングの効果は一挙に低下します。野外活動中は肉体や精神が疲労していても、気持ちが高揚しているために、ボランティア自身が時間をかけたトレーニングを望んでくる場合があります。その場合、スタッフ

は、そのボランティアにとって適切な、トレーニング内容、時間を判断する必要があります。

また、ボランティア自身の能力（野外活動の知識・技術・技能、人間関係能力など）も把握をして、最適な方法を実施する必要があります。

■組織的な役割、約束を明確にする■

野外活動（組織キャンプ）では、スタッフ・ボランティアの役割が明確に定められています。緊急時の対応、自然環境や人的・物的環境の変化にも、それぞれの役割に応じて、柔軟かつ速やかに対応できる体制が用意されています。

ボランティアの役割、意思決定のプロセスなど、組織のルールを遵守することが、子どもにとって安全で楽しい野外活動を実施するためには必要です。野外活動中のトレーニングにも、この考え方を徹底するようにします。

野外活動中のトレーニングは、対象となるボランティア自身が〈相談をする〉という形が多くなります。その時、組織上、だれに相談をするのかを明確にしておく必要があります。また、適切で効果的なトレーニングができるように、個々のボランティアから〈相談を受ける人（トレーニングをする人）〉を、その経験と能力から判断して、あらかじめ選んでおきます。

〈相談〉を組織のなかで明確にしておくことで、そこで出てきた課題を組織全体で補完し、解決していくように取り組むことできたり、ボランティアの健康状態や運営全体の状況を考慮しながら、臨機応変に対応することも可能になります。

同じ役割や経験を持つボランティア同士が、対等な関係で〈相談〉をして、効果をあげる場合も多いので、その効果を十分に理解した上で、方法や時間をきちんとマネジメントしていくことが必要です。

野外活動実施中のトレーニング① 1日の〈ふりかえり〉

1. 夜のミーティング

事前準備が万全であっても、その時の気候、子どもたちの状況により、必ずしも予定通りのプログラムになるとは限りません。また、順調に進められているとしても、多くの人がかかわっているため、互いの状況を確認したり情報交換をすることが大切です。

24時間、子どもたちと生活をともにする野外活動では、その活動に対する日々の〈ふりかえり〉が必要です。運営の確認をすると同時に、子どもたちの支援のあり方について、スタッフとボランティアが確認しあうことで、より充実した活動をめざすと同時にボランティア自身の意欲を高めていきます。

子どもが活動している時間は、ボランティア全員が集まれないので、子どもの就寝後に集まって、〈ふりかえり〉を行います。全員そろわなくとも、役割ごとに時間を決めて集まる方法もあります。夜間に限らず、昼間の時間帯や、プログラムの合間に時間を設けることもあります。

常に子どもと向き合う活動は、子ども好きのボランティアであっても、緊張感を伴います。子どもから離れて、同じ役割の仲間とゆっくり会話をすると、活動にかんする同じような悩みを語り合い、共有することで、気分転換やリラックスすることができます。明日に向けて新たな気持ちで、子どもとの活動へむかうために必要な時間です。

■ 〈ふりかえり〉のポイント ■

〈ふりかえり〉は大きく分けて、2つのポイントがあります。一つはプログラムの進行、もう一つは子どもたちの活動の様子、活動上の問題点を共有することです。

プログラムの進行では、翌日のプログラムの開始時間、準備する物品や場所、ボランティアの配置などの確認を行います。予定していたことを変更するときは、そのことも含めて確認し、連絡を徹底します。不明な点などを相互に確認することで、よりスムーズな活動をめざします。

よくある変更点は、天候によるプログラムや場所の変更です。内容や物品準備なども変わってきます。また、子どもたちの様子から時間や場所を変更することもあります。野外活動も後半になると、ボランティアも疲れから、予定していたことや、打合せ内容を忘れてしまうこともあるので、再度確認することで自信を持

持つて活動できるようにすることも必要です。

子どもたちの活動の様子、活動上の問題点を共有するために、グループ(班)活動での子どもたちの様子、その時の課題、人間関係での問題などを、グループ(班)リーダーのボランティアが報告します。子どもたちに直接かかわるリーダーからの生の声は、間接的にかかわるマネジメントスタッフにとっても貴重な情報になります。

漠然とした報告では、直接子どもと接していないマネジメントスタッフには、分かりにくい内容になります。グループ(班)運営に悩んでいるボランティアは、自分の状況を他者に理解してもらいたい、話すことでも課題の解決をはかりたいという思いから、内容が細部にわたりすぎて、報告が長くなることがあります。あらかじめ視点を定め、簡潔に報告してもらうようにします。

例えば、「今日の活動で、班の人間関係がいちばん変化したと思うこと」「今、困っていること」「他のボランティアにも気をつけて見て欲しい子どものこと」というように、視点を定めて〈ふりかえり〉を行います。

グループ(班)ボランティアだけに子どものケアを任せるのでなく、情報を共有することで、スタッフ・ボランティア全体で子どもたちにかかわり、バックアップしていく体制をとることができます。

注意点は、個人情報にかかわる繊細な部分があることです。子どもの性格や行動、病気・障害などに関する事柄は、守秘義務は当然のことですが、かかわるスタッフが多い場合は、全体で共有するのではなく、限られたメンバー内だけで情報を共有することが適切であると判断することもあります。

予算に余裕があれば、飲み物や菓子などの夜食を準備し、リラックスした、和やかな雰囲気を作ることも、効果的です。日中のボランティアの活動の労をねぎらう形にもなります。

2. 明日の活動に生かすために

■ グループリーダーのボランティア ■

グループ(班)リーダーのボランティアは、常に子どもたちとともに活動し、子どもたちの生の感情を受けとめ、子どもたちをいちばんに考え、感じができるボランティアです。その場その場は、必死に活動をしています。時にはうまくいかなかったり、子どもたちの言葉に悩んだりすることがあり、「これでよか

ったのか？」と自分自身で葛藤することも多い役割です。

同じ立場であるグループ(班)リーダーのボランティアと話すことで、自分の行動をふりかえり、悩みを共有することができて、課題解決に至ることもあります。また、経験者に助言を得たり、課題の解決方法をともに考えたり、明日に向けた目標や班運営を決めていくこともできます。

全員がそろう〈夜のふりかえり〉では、細かいところまで話をして、課題解決に至るまでの相談がしにくい点があります。人数の限られた、同じ役割のメンバーで話しあうことは、共感する部分が多く、子どもとの活動の緊張から開放される機会ともなります。

〈ふりかえり〉で話し合ったことは、グループ(班)リーダーのボランティアが、子どもの生活の記録やグループ活動を記録するときの材料ともなります。

■マネジメント部門のボランティア■

野外活動の全体進行を行うグループであり、〈夜のふりかえり〉では、明日のプログラム進行と役割分担の確認とその日の活動のふりかえりの2点を話し合います。

明日のプログラム進行と役割分担の確認では、最終的な人員・メンバーの動きなどを確認し、あわせて準備を行います。スムーズなプログラム運営には、マネジメント部門のボランティアが情報を共有し、役割分担を明確にしていくことが大切です。

その日の活動のふりかえりでは、互いに気づいたことなどを話し合います。問題点・課題としてあげられた事柄については、情報の共有不足が原因なのか、ボランティア組織の人間関係などで意思疎通がうまくいっていないのが原因なのかを確認し、解決をはかります。ボランティアが気持ちよく活動ができるように、一人ひとりの発言を聞いて、互いの気持ちや行動に気づいていくことが必要です。

全体を見ながら野外活動を進行するマネジメント部門のボランティアは、広い視野で子どもの活動を見ることがあります。仲間になじめないでいる子どもを発見して声をかけたり、その情報をグループ(班)リーダーのボランティアに伝えたり、全体的な視点から子どもを支えていきます。

子どもと直接かかわることが少なく、全体運営に追われて、子どもたちの活動の様子を感じられないこともあります。初心者がマネジメント部門を担当する場合に、起こりがちなできごとです。このような時も、ボランティア同士の意見交換をとおして、タイムリーではないかもしれないが、子どもたちの状態を全体で

把握することができます。ちょっとした意見でも、それが認められることで、孤立したと思い込む状況から解消されることがあります。

■高校生ボランティア■

高校生ボランティアは、子どもたちの“あこがれ”的存在であり、いい意味でも悪い意味でも注目されます。その行動が、子どもたちにさまざまな影響を与えること多く、彼らの行動が子どもの活動のムードを作ることもあります。

年齢が近いことで、子どもたちが素直に高校生に気持ちを話したり、また子どもから相談を受けることがよくあります。高校生は子どもの声を“子どもから得た秘密”として、一人だまっていることもあります。まれに、その情報が大切なことで、スタッフ・ボランティア全体で共有して子どもを支援しなければならないこともあるので、事前に子どもの情報を共有する重要性を伝えておく必要があります。

高校生ボランティアの〈ふりかえり〉では、担当するスタッフ・ボランティア(大人)がその意見をくみとり、彼らの行動の意味を再確認することが大切です。子どもにとってよりよい活動とは何かを焦点に〈ふりかえり〉を行うことは、高校生の人間的な成長をうながします。

野外活動は、体力も精神力も求められる活動であり、高校生であっても日常とは違う活動で、目に見えない疲労がたまります。睡眠時間をきちんと取れるよう、〈ふりかえり〉は短時間で終わるようにします。疲れが見える時は、毎日ではなく、また開催時間も夜に限定しないで、日中にその時間をとることなどもあわせて検討します。

野外活動実施中のトレーニング② 活動記録をとる

1. 活動記録をとる意味

子どもたちの活動記録は、グループ（班）リーダーのボランティアがとります。野外活動をとおしての、子どもたちの成長・発達の様子を記録するものとなり、野外活動の効果測定にもつながります。

ボランティアにとっても、自身の成長をうながし、よりよい子ども支援のあり方を考察する機会となります。活動の記録は、初めて参加するボランティアも記入しやすいように、子どもを見る基準や視点を決めて、それにあったフォーマット（書式）を用意し、記録をしてもらっています。

野外活動の記録は、実施報告書を作る際の資料となるだけでなく、継続して野外活動を行うときに、企画段階での時間配分の検討、内容の精査などを行ううえで、重要な資料になります。

2. 記録の方法

野外活動の記録には、〈写真記録〉〈ビデオ記録〉、そして〈文書での記録〉と、大きく3つの方法があります。

■映像関係の記録■

〈写真記録〉は、子どもたちの様子やプログラム活動の記録を残すだけでなく、終了後に参加した子どもたちに記念として配布（有料・無料）し、思い出に残るようにします。また、〈ビデオ記録〉は、その場の雰囲気や子どもの表情を、より具体的に記録できます。編集することで、記念の映像記録として配布（有料・無料）することも可能ですが、手間と時間がかかります。

野外活動の実際を見ることができない保護者にとっては、子どもの様子を知ることができる記念の品になります。

■文書による記録■

〈文書での記録〉は、大きく2つに分けられます。一つは、プログラムの進行にそって、〈時間系列で記録〉をするものです。予定していたプログラムが順調に進んだのか、それとも変更したのか、変更をしたのであれば、その理由などを記録します。今後、野外活動を実施するうえで、時間配分や進行などを考えるときの留意点などが確認でき、よりスムーズな野外活動を運営するための大切な資料となります。

もう一つは〈子どもたちの記録〉です。子どもたちの身近なところで生活をともにしているグループ（班）リーダーは、野外活動中、子ども一人ひとりの様子や

グループの様子などを見ています。これらを記録して、野外活動実施後、保護者への報告の資料とします。

3. 活動記録の実際

野外活動の記録は、実施記録としての意義とあわせて、もう一つ大切な意義があります。それは、記録をつけるグループ（班）リーダーのボランティアにとって、自分がかかわった子どもたちを、自分がどのようにみていたかを考えたり、少し冷静に班の様子などをふりかえる機会となることです。子どもたちの活動記録をつけることが、よりよいかかわりをするために大切なものです。

何を見て、どのように記録をすればよいのかがわからないと、おもうように記録をつけることができません。忙しい野外活動中に記録することは、時間的にも難しことなので、記録のフォーマットを用意しています。

■記録フォーマットと書き方の一例■

記録用紙は、〈子どもたち個人〉と〈グループの様子〉を分けて記入するようにしています。

【〈子どもたち個人〉の記録】

子ども一人ひとりについて、その日1日の様子を記すものです。書きたいことが浮かぶ子どもと、そうでない子どもがいます。そこで、1人について1つだけ、その日よかったと思った行動や言動、班員（仲間）に対して影響を与えたことなどを記入します。

記述は、具体的な表記を心がけるように指示します。「Aくんは1日明るく元気でした」という記述は、何を見てそう思ったかが、第三者には伝わりません。そこで「Aくんは、炊事の時、自分から“食器洗いをするよ”といって、ぴかぴかになるまで洗い物をし、その勢いで、班員全員、あっという間に片付けが終わつた」と書けば、A君の様子がわかりやすく、いきいきと伝わり、ほかのメンバーとの関係も見えてきます。

ときどき、どんなに思い出そうとしても思い浮かばないことがあります。あまり目立たない、発言が少ない、さりとて生活面では手間がかからない子どもには、大人の眼が行き届かないことがあります。記録の記入をとおして、こうしたことに気づいたときは、翌日、その子どもに対して積極的に声をかけたり、様子をうかがうなど注目してみることも大事なことです。

記録をつけることで、ボランティアの子どもへのかかわり方を客観的にみることができるもの、記録することの良さといえるでしょう。

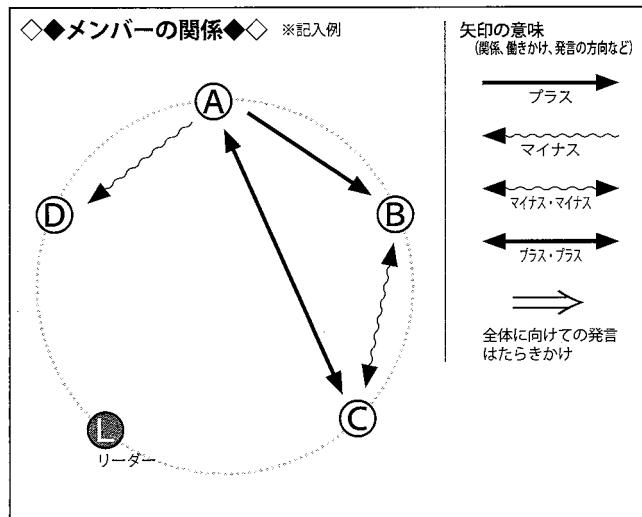
【子どもの記録用紙】

【〈グループの様子〉の記録】

グループ(班)運営をする上での課題や、かかわるグループ(班)リーダーの悩みを分析するときに役立つのが、〈グループの様子〉を記した記録です。

2種類の記録フォーマットで記録します。一つは、子ども同士、そして子どもとボランティアの関係を図式に表す方法です。心理学や社会福祉学などの分野で使用されることもある「ソシオメトリー」の方法を取り入れたもので、子どもの発言や行動から、誰とどのようなかかわりがあるか、また、そのかかわりが好意

【グループの記録用紙①】



的なものか、それとも反発しあうような関係なのかを、記号で表します。頭の中ではあいまいな人間関係が、図式化することで、明確になり、個々の関係だけでなく、班全体の様子も感じることができます。また、継続して記録することによって、人間関係の変化をとらえることができます。

もう一つは、グループ（班）リーダーのボランティアが、班の運営をするうえで「よかったです」と感じたことを記入します。意図して行動したことの成果、子ども同士の関係のなかで「いいな」と思った出来事を思い起こすことで、1日をふりかえる機会となります。

最後に、グループ運営での「課題」を書き出します。ボランティア自身が「困っていること」「悩み」を「言葉」に具体化することで、その対策を考えるきっかけとなります。「よかったこと」や「悩み」などの自由記述は、文章にすると時間がかかるので、ポイントを箇条書きにするようにします。

■明日への目標■

記録フォーマットでは、冒頭に、前日に翌日の目標を決めて記入する欄を設けています。今日1日の様子をふりかえり、記録しながら、明日の活動への励みになる目標が考えられると、また新たな気持ちで、子ども活動に向かう力をえることになります。

【グループの記録用紙②】

◇今日のグループ活動で、あなたが「うまくいった！」「よかったです」と感じたことは何か？

◇あなたがグループ運営をする上で、今、問題点・課題を感じている点、悩みは何か？

野外活動後のトレーニング

野外活動を終えて“まとめ”の作業

1. 事後トレーニングのねらい

野外活動の本番が終了すると、参加者への報告準備、来年度への課題や目標の明確化など、さまざまな“まとめ”的な作業を行います。スタッフだけでなく、ボランティアとともにを行うことで、野外活動後のトレーニングと位置づけています。

■野外活動事業の発展のために■

ボランティアが参加することで、野外活動プログラムの充実、深化がはかれます。そのためには、事前・実施中だけではなく、終了後のボランティアトレーニングが大切です。ボランティアのアイディアを生かして実施したプログラムや、子どもへの直接的なアプローチなどを具体的にふりかえることで、次なる発展への糸口が見えてきます。

ボランティアの自己満足で終わらせないためにも、大切なトレーニングになります。

【ボランティアの成長のために】

～Do → Look → Think → Grow】

体験型のトレーニング方法の一つに「Do → Look → Think → Grow」という考え方があります。

“Do”は試みること。与えられた課題に真剣に取り組むことで、野外活動トレーニングに当てはめると、事前と実施中のトレーニングに当てはまります。“Look”は、結果を考え直してみること。“Think”は、まとめて一般化する段階のことです。この2つの段階が、実施後のトレーニングにあてはまります。そして、最終的に“Grow”。まとめて一般化した体験を自分のものとして、新しい行動をとり、成長すると言うわけです。

実施後のトレーニングでは、事前、実施中のトレーニングでの発見や学びをふりかえることで、今後の課題や目標を明確にしていきます。同時に、〈ふりかえり〉をとおして学んだことを、一般化してボランティア全体で共有できるようにします。

【ボランティア自身の継続的参加意欲をうながす】

子どもの成長に寄与する野外活動事業が、複数年度

〈ふりかえり〉は、次の活動への“第一歩”



にわたって継続して実施されることは重要です。継続して実施することは、野外活動の効果を高めることにもなります。そのためには、予算などの確保とともに、運営するボランティアの確保も必要になります。

ボランティアは、学生や社会人など社会的にさまざまな立場の人が集まっているので、半年から1年先の野外活動に参加する確約をとることが、難しいと考えられます。そこで、事後トレーニングを通じて、次回の野外活動に対する期待感や意欲を向上させることで、継続しての参加をうながします。

ボランティア自身が事後トレーニングのなかで、「子どもたちにとって、もっとよいキャンプをしたい」「次はこんな目標を持って参加したい」「自分の成長のためにも参加したい」などの発見があると、次回への継続的参加意欲を高めることになります。

2. 事後トレーニング運営のポイント

実施後のトレーニングは野外活動終了後、1～2か月の間に行います。ボランティア自身が、野外活動で感じた、喜び、くやしさなどの感情、学びや課題を発見した体験などが、生々しく記憶に残っているうちに実施することが重要です。

実施後のトレーニングは、個々のボランティアがスタッフと1対1で行う個別トレーニングと、スタッフ

と参加したボランティア全員で実施するグループでのトレーニングの2つに大別できます。

【体験にもとづいたトレーニング】

「Do → Look → Think → Grow」のプロセスに沿って進めていきます。“Do”の部分は、ボランティアが実際に体験した事柄をもとに進めます。架空の事例などをもとに進める方法もありますが、野外活動ボランティアのように活動経験の幅が一人ひとり違う場合は、あまり有効な手段と言えません。

初めて野外活動に参加したボランティアでも、積極的に取り組めるように配慮する必要があります。そのためには、ボランティアが見て、感じて、考え、取り組んだ体験をもとにしたトレーニングメニューを作成することが大切になります。

【ポイントをしほる】

ボランティアのどの体験に焦点を当てるのか、ポイントを絞り込むことが必要です。野外活動中にボランティアが体験するさまざまな体験は、どれもボランティアの成長や、野外活動組織の成長に結びつくものばかりだと考えられます。一つひとつの体験を、実施後のトレーニングでしっかりとふりかえることで、より深い学びに変えることができます。しかし、限られた時間内で、すべての体験をふりかえることは不可能なので、テーマの絞り込みを行います。

ボランティア全員で行うグループでのトレーニングでは、多くのボランティアが共通して体験した事柄をスタッフが見つけ、テーマの設定を行います。個別のトレーニングでは、ボランティア自身が自分の課題を発見し、その解決が望めるようにスタッフが働きかける必要があります。

【次への課題（個人、組織）を明確にする】

野外活動実施後は、ボランティアの気持ちも高ぶっていること多く、反省会などでは「楽しかった」「おもしろかった」「うまく行かなくて残念だった」など、自分が感じたことだけの話し合いに終始したり、「あれもだめだった、これもだめだった」とマイナス点ばかりをあげて、次回への期待が感じられない話し合いになるケースがあります。

事前にトレーニングメニューを作成

し、ボランティアが自分の体験を客観的に振り返り、個人およびグループの課題を明確にするように働きかけます。単にできなかったことをあげていくのではなく、事前に設定した目標をどの程度達成できたのか？そのアプローチは適切だったのか？そこから見えてきた新たなる課題は何か？など、次の野外活動に生かせるように、目標や課題を明確していくことが必要です。

【記録し、次回に生かす】

実施後のトレーニングは、次回の野外活動の発展やボランティア個人の成長につながるものです。その意味でも、内容をきちんと記録し、保存することが重要です。記録の方法はさまざまですが、誰が見ても分るように、簡素で整理された記録にします。

【「ジュニア・アウトドア・スクール」(JOS) 全体フィードバックまとめ】

子ども事情	課題・発見
「大変だけど、やってみよう！（冒険心）」がない	「冒険心」があるのか？大人がそうさせているのか？わくわく、ときどき感を大人が見せる
子ども時代から、しばられている（考える幅がない）	せめてキャンプの中では、冒險、挑戦を
大人の管理のもとでしか遊べない	キャンプではチャレンジも自制心
イレギュラーがあるから	応用力が生まれ、それが冒險上手に…
「ないよー」	「じゃあいいやー」の流れ
代用できない	プログラムを優先している
なんでも、かんでも、ルール化されている	グレーじゃないことが増えている グレー、空き地というあいまいな場所が増えている
グレー社会、グレーがなくなっている。 マニュアル社会	大人の都合で、危ないことをさせなくなる。
社会全体（大人）が白黒をつけたがっている	
やりたい事がない、みつからない	親の言うとおりにしてきた
違うということを、みんないやがっている	だから、みんな合わせちゃう？ 仲良くする = 仲良くなっていく
ぶつかり合う事が駄目？	「メンドクサイ」は人生の敵
信頼と信用	信用は信じる事、信頼は信じて頼ること
皆と違う事、自分と違う事を受け入れられない	
みんな仲良くしなくちゃいけないの？	「しなくちゃ」いけないことはない。自然となるもの
自分がこどもの頃、よくケンカしていたのに、今はしない→下手になっている	ケンカしないようにする大人がいる 表面化しなくなっている
みんなと仲良くしなくっちゃいけないの？	嫌いだけど、仲良いフリをする
フリをしないと生きづらい	フリをするからおかしくなる
班の子がいなくても「知らなーい！」	無関心？防衛？
集団活動は仲良くしなくちゃ	結果的に仲良いフリ
キャンプは好きな人同士ではない	それが魅力
「人に興味がない」「人の発言に興味がない」	「時間が遅れても気にしない」「人がいなくなても気にしない」
「ぶつかりあわない」「ケンカしないようにする」	ケンカすることで人の価値觀に出会う
真剣にやらずに、ノリでごまかす	常に馴れ合っている。大人の影響？子どもは大人を見て育つ
失敗がこわい？だからマニュアル化	リーダーが予定調和にならない
①子どもの変化や課題から考えられる「これからJOSここがポイント」	
A) JOSはどこへ行く？	
過保護すぎない準備、生活に最低限必要なものだけ持つ／創造性が少なくなっている（定番、物があふれている）／プログラムが本当に必要か／JOSの真髄は？根本は？人間愛？	
B) リーダーとは何か？	
見た事もない、冒険スピリッツを持っている／子どもに何かを伝えたい熱い心が必要／リーダーにはいろんな人がいてよい。それを受け止める組織が必要	
C) キャンプの人間関係	
人間は孤立した1人の存在。だから個性を生かす事、個性を認められることが大切／良好な人間関係から生まれる、「自分に自信を持つこと」「自分の意見が言えるようになること」／「自分に自信を持つこと」は他者から認められる、他人との関係の中で生まれる／集団活動は仲良くなる事が目的か？／集団活動を行うことは何故大切か？集団の魅力は何か？	

野外活動後トレーニング① 個人の〈ふりかえり〉

1. 次回の活動へのステップめざす

野外活動実施後に、参加したボランティアと活動をふりかえり、活動に参加することによって何を得たのか、また戸惑いや難しかったことなどを話してもらいます。特に、グループリーダーであったボランティアとは個別に〈ふりかえり〉を行い、野外活動の体験を深め次回の活動へのステップをめざします。

参加した全員と〈ふりかえり〉をすることもあれば、全員が集まらない時には個人に対して行うこともあります。

■個人の〈ふりかえり〉のポイント■

一人ひとりが自分自身の活動をふりかえることで、活動から得た体験を実りあるものへと昇華させ、確固たる体験とします。また、〈ふりかえり〉をとおして得られる子どもたちの様子は、野外活動中の子どもの成長記録として、保護者に伝える大切な情報となります。

〈ふりかえり〉のポイントは、「参加してみた感想」「困ったことはなかったか?」「子どもたち一人ひとりの生活の様子」「班活動をとおしてのグループの様子、特にグループが変化し成長をとげるなかで、子どもたちがどのように変わっていったか(子どもたちの成長)」などがあげられます。

【参加してみた感想】

漠然とした問い合わせですが、野外活動後、少し期間をおき冷静になってから、参加した感想を聞きます。今、何が心に残っているのか、その活動に対する充実感や楽しさ、逆にやりきれなかった思いなど、思うままに話してもらいます。その発言のなかから、ボランティアが野外活動をとおして何を得たのか、ボランティア自身にどんな変化が生まれたのかを推察します。

【困ったことはないか?】

活動中は、その場の対応に追われ、気づかなかつたこと、思っていても話せなかつたことがあります。そこで、改めて活動をふりかえり、ボランティア自身が困った点について聞いてみます。

子どもたちの対応、人間関係作り、班運営を行ううえで難しかったこと、自分が考えていたようにできなかつたことなどをあげてもらい、なぜうまく行かなかつたのか? 原因はどこにあるか? などをボランティアと一緒に考えていきます。

〈ふりかえり〉をすることで、次の機会に、どのよう

に子どもたちとかかわるかが学習ができたり、〈組織キャンプ〉の運営そのものの課題を見いだすこともあり、よりよい活動作りをめざす機会ともなります。

〈ふりかえり〉は、よりよい活動作りのためのものであり、個人の行動を掘り返して追求したり、反省をうながすものではないことを注意してください。

【子どもたち一人ひとりの生活の様子を聞く】

子どもたちの身近で生活をしていたグループ(班)リーダーのボランティアだからこそ、野外活動中の子どもの様子を聞き取ることができます。親元を離れて参加している子どもの保護者にとって、家庭や学校とは違う環境で、どんな生活をしていたのか、日常とは違う仲間とどのように活動していたのかを知ることは、わが子の成長の道しるべとなる貴重な情報になります。

スタッフが、全ての子どもの生活を把握することは大切ですが、こうしたボランティアからの細かな情報がなければできないことです。

【グループの様子、特にグループの成長と

子どもたちの変化(子どもたちの成長)を聞く】

野外活動では、異年齢の小集団活動が子どもたちの成長をうながす場面がたくさんあります。「野外活動から帰ってくると、なんだか一回りも成長したように感じます」という、保護者の感想を聞くことがあります。子どもが一人で成長したというよりは、仲間との共同生活で得られた成長の一つといえます。

グループ運営を担当するグループ(班)リーダーのボランティアも、一人ひとりの様子だけでなく、担当したグループの活動をふりかえります。個人の様子や班での出来事、子ども同士の関係の深まりなどに着目してみると、野外活動当初とはちがったまとまりや、行動のスムーズさなどを感じることができます。

もちろん、けんかなどで関係が悪くなることもあります。こうした様子を思い出しながら話をしてもらうことで、グループから見る子どもたちの変化や成長の過程をかいまみることができます。

〈ふりかえり〉を行うことで、グループを運営するリーダーの活動ぶりや、課題を見いだすことができます。子どもたちの成長の過程も感じられ、やりがいのある活動としてボランティアの心のなかに位置づけられます。

野外活動後トレーニング② グループの〈ふりかえり〉

1. 「役割別」「全員」に分け 〈ふりかえり〉

グループの〈ふりかえり〉大きく2つに分けられます。一つは、〈各役割別のふりかえり〉です。本部で生活支援に携わったボランティア同士で、物品係や食事係などのチームごとに行います。野外活動中の具体的な取り組みを再チェックし、目標達成の度合いや課題、次回への引継ぎ事項などを話し合っていきます。

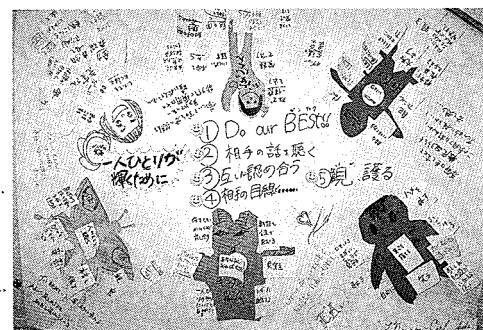
もう一つは、野外活動に参加した〈ボランティア全

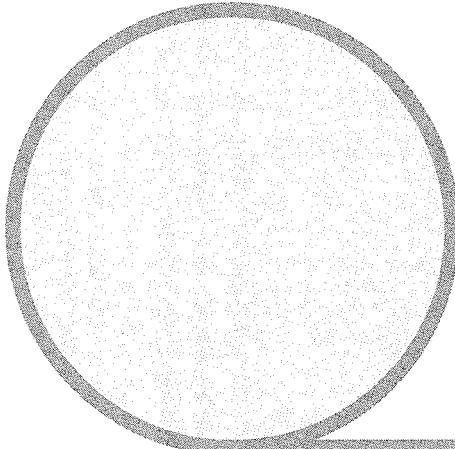
員で行うふりかえり〉です。あらかじめスタッフが適切なテーマを設定し、実施します。野外活動実施中に全員が直面した体験をもとにしたテーマ、事前に目標とした事柄をもとにしたテーマなど、最大限ボランティア全員の意欲的な取り組みが引き出せるテーマを設定することが重要です。また、参加するボランティアが10～20人以上となる場合は、さまざまなワークショップの手法を活用し、短時間で効果の上がる方法を取り入れます。

〔ふりかえりの事例紹介〕

- テーマ** □①子どもにとって居場所となる野外活動に必要な要素を考える
②実施された野外活動の効果測定を行う
- 参加ボランティア** □ 20人
- 時間配分** □ 1時間30分（目的、進め方の説明：10分／実施：60分／まとめ：20分）
- 準備するもの** □付箋紙（1人20枚程度）／模造紙（グループに1枚）／ラシャ紙（A3：緑、赤、青）／マジック（グループに1セット）

時 間	内 容
00:00	目的の確認 今回の野外活動では、事前に「子どもにとって居場所とは何か？」という学習をしました。 その時に出されたキーワードは次の通りです。 「安心感」「開放感」→ 心のよりどころ 「存在感」「期待感」→ 心のつながり 「価値観」「充実感」→ 心のはり
00:10	今回の野外活動は、子どもたちがこの3つのキーワードを感じられるようにしたいという目標を持って取り組みました。今日はみなさんがその目標を達成するためにどんな取り組みをしたのかをふりかえることで、野外活動が子どもたちの居場所となるために必要な要素を考えます。 ①それぞれのチームで、「安心くんと開放ちゃん」「存在くんと期待ちゃん」「価値観くんと充実さん」人形をラシャ紙で自由に作ってください。 ※4つのグループで実施。手でラシャ紙を切って自由に作る。共同作業で楽しいムードづくりをめざす。 ②白い模造紙の上に作った人形を置いて、それぞれの項目について、個人で自分が行ったアプローチを付箋紙に書き、該当するところにはつけてください。 ※アプローチは子どもに直接という部分もあれば、リーダーに直接、組織に対して、それから自分に対してと、さまざまな視点から考える。 ③個人で項目を書き終わったらそれを各グループでシェアしてください。 ④これからグループ討議を行います。今自分たちで出した居場所作りのためのさまざまなアプローチを参考に、次のことを話あってください。子どもにとってより良い居場所としての野外活動を行うために、大切にしなければいけないこと5か条を決めてください。その5か条は、自分の行ったアプローチと連動していること、また話し合いのなかで見つけた組織や自分の課題と連動していることが大切です。 ⑤5か条は、模造紙の真ん中に書いてください。そしてその回りに、安心くんたちをはってください。最後に、その5か条で今この野外活動が要素としてすでに持っているものには、ニコちゃんマーク、今の野外活動の課題として考えられるものには、ガンバレケンマークを付けてください。
	【グループ作業開始 60分】
01:10	①1グループ3分で発表 ②まとめ
01:30	終了





参加した ボランティアの感想

野外活動ボランティア養成プログラムに参加して

野外活動の事後トレーニングとして、個々に自分をふりかえり、次の目標を立てる方法の一つとして、記録集をまとめます。各参加者やボランティアの感想や〈ふりかえり〉を文章にまとめ掲載することで、思い出を共有します。

参加したボランティアの気づきや新しい発見などを“学び”的観点から、文集の一部を抜粋して紹介します。

■もっとできることがある■やりたいことはたくさんあった。自分のもてる力はすべて出し切ったように思える。このキャンプにかかわって7回目。学生のころとは違う力が自分にはついてきたと思う。社会人になり、学生の時とは違う経験や考えたことがある。そのベースは、今まで出会ってきた子どもたちに教わってきたと思う。だからこそ次のキャンプで、またたくさんの子に会い、「もっと」自分にできることがあるはず。そう思わずにはいられない。この「もっと」という気持ちを大切にして、次のキャンプに向けて準備をすすめていきたい。(夏低学年キャンプ ユニットディレクター・男性)

■キャンプから学んだこと■今の仕事を選んだ理由は「たくさんの人と何かを創り上げることが好き」というものだった。1つの目標に向かって、大勢で何かを成し遂げる達成感と喜び。私にとってそれは何よりもやりがいや楽しみのあるものだった。それはキャンプから学んだものだった。自分がそうであったように、今の子どもたちにも生きる力や人の素晴らしさ、難しさ、そしてそれを超えたところにある楽しさや喜びを感じてほしい。そういう大事なものを全身で学べる空間だと信じているから、私はキャンプに参加し続けている。(夏低学年キャンプ グループリーダー・女性)

■誰よりも近くにいられたこと■キャンプのなかでは4日間毎日みんなの違う顔を見ることができました。みんなが成長していくこの毎日だけは、みんなのお父さんやお母さん、兄弟やおじいちゃんおばあちゃんよりも、誰よりも近くで見ることができました。この思い出は僕とみんなだけの特別な思い出です。キャンプに一緒に行けたのが本当によかったです。一人ひとりがいいところをいっぱい持っているとっても良い班でした。持っている良いところはもっともっと良くして、持っていないものはこれから見つけてこれからもがんばってください。(夏低学年キャンプ グループリーダー・男性)

■でっかい大人になってね■私は目の色が左右で少し違う。大人たちは気がついても何も言わない。それって大人の優しさ。でも子どもたちは違う。不思議に思ったらストレートに「何で目の色がちがうの?」。「子どものころの病気で、片方だけ見えないんだ」そう言うと、小さな手がいっぱい伸びてきて、ホントに見えていないか確認。それで終わるかと思ったらびっくり、その後、大抵の子が自分も片目をつぶって、試してみる。ステキだなって思った。「相手の身になって」なんてことを言わなくても、自然にやってのける。友だちまで呼んで見物に来た子も見終わったら、あとは普通に遊んでくれる。キャンプでは、いつもと違う友だちや大人たちと、いつもと違う生活をする。初日には“違う”人たちにとまどっていたのに、助け合うことや意見を伝えること、そして聞くことが、みるみるうまくなっていく。違うからおもしろいんだよね。子どもってホントにすごい。そのまままでっかい大人になってください。(夏低学年キャンプ マネジメントスタッフ・女性)

■新しい自分に気付いた■「みんな行くぞ!!」みたいな、割と勢いで持っていくタイプだったのだが、今回のキャンプの事前説明会で班のみんなに会ってみると、どうもそのやり方はこの班には向かないような気がした。この子たちにはゆったりとキャンプを楽しんで欲しい。そんな気持ちにさせる班だった。今までとの違いに悩むこともたくさんあったけど、一緒に活動しているうちに、かかわり方は少し変わっても、大事にしたいことは変わらないことに気づいた。この班の仲間でいて良かったと思ってほしい。ふだんはできない遊びを楽しんでほしい。何か1つでも成功した体験をお土産を持って帰ってほしい。自分自身の新しい一面に気づかせてくれたのと同時に、今まで大事にしてきたことを再確認させてくれたみんなに心から感謝したい。(冬低学年キャンプ グループリーダー・男性)

■キャンプのみんなに伝えたい■今年のキャンプに参加していくなかで、強く感じたのは、キャンプにかかる大人同士の「チームワークと思いやり」だった。困ったとき、うれしい時にお互いがキャンプ中に言いたいことを言い合えた。そんなあたたかい仲間とキャンプを作っていてすることはすごくうれしい。みんなが思いをもっている。そのことが準備段階から感じられた。だから信頼できだし、自分らしくキャンプを作っていくと思えた。参加する子どもたちにも、この心地よさを感じて欲しい。「チームワークと思いやり」のある仲間と一緒にいるとなんでもがんばれる。この感覚を知っていると、「大人になった時にどんなことにも挑戦できるんだぞ！」と大きな声で伝えたい。そう思うとまだまだぼくは、キャンプをやめられそうもない。(冬低学年キャンプ ユニットディレクター・男性)

■支え合って■今回のキャンプは、自分の不注意から体調を崩してしまい、いつもできることができなかった。自分が自分でないようなおかしな感覚。悔しく、もどかしかった。けれど、そんな自分でも、周りにはいつも支えてくれるたくさんの仲間がいた。大人になるにつれ、1人でできることが増えてくる。けれど、人は人に支えられている。だから、頑張る力が湧いてくる。私も人の支えになれる優しく温かい人でありたいと思う。(夏高学年キャンプ ユニットディレクター・女性)

■新たな楽しさ■その子はいつもかまど場に置いてある僕の皮手袋を使って、黙々と火の様子を窺っている。真剣な眼差しは、とても輝いていた。同時に子どもにも見られているんだなと感じた瞬間でもあった。熱くなったり鍋を運ぶために自分の皮手袋をはめてみると、なんだか違和感がある。よく見ると明らかに指が短くなっているし、火に当たりすぎてカチカチになっている

る。そう、僕の皮手袋はその子の手のサイズになってしまったのだ。それが分かった瞬間、笑うしかなく、同時にいつまほは感じることのできない、新たな楽しさに気づいた。(夏長期高学年キャンプ グループリーダー・男性)

■支えられてこそチーフ■キャンプ中、「できないのに何でチーフなんだろう…」って泣いていたら、「できないからチーフなんだよ」といわれた。その時は自分のことで精一杯で分からなかっただけで、今思うと、自分はまだまだ未熟者だけど、それを支えてくれる心強い人たちに恵まれていた。いつも自信がなくて泣いてばかり。でも、こんなことを言ったら、また甘えてと言われてしまうかもしれないけれど、支えてもらっているという思いを誰よりも強く感じができるのがチーフなのだと私は思う。泣いてばかりはご愛嬌。でも、来年は自信を持って周りを支えられるようになりたい。(夏高学年キャンプ マネジメントスタッフチーフ・女性)

■まだまだだよ■客観的に自分の成長を見るのは難しい。自分のなかには「4年前とは違うんだ」とか「低学年のキャンプに参加した時よりも成長できたかな」とか思うことはあっても、その時の自分の状態とか、そのキャンプに対するイメージなどによっても記憶はゆがんでしまうんだと思う。これからも何回も続けていくと、それも見えてくるのだろうか。次に参加するキャンプが終わった時には、参加する前の自分に対して「まだまだだよ」と鼻で笑えるような成長を遂げて帰ってきたい。(春高学年キャンプ グループリーダー・女性)

■仲間と共有することで■みんなが楽しそうにしていると私も楽しくなる。色はどんな色同士でもしっかりと混ぜれば混ざり合い、色が変化する。そして、別の色が加わるとまた新しい色へと変化する。私たちも、一人が笑いに加わるとその笑いは変化し、もっと楽しく大きな笑いになる。みんな違ってみんないい、それぞれ自分の色を持っている。その自分の色だけでも素敵だが、仲間を増やすと深みのある色へと変化する。キャンプに行くとみんなから何か必ず発見させてもらってくる。それを無駄にしないように、ぐんぐん成長していきたい。(春高学年キャンプ グループリーダー・女性)

■活動を支えるやりがいと喜び■直接的に子どもたちと接した時間は、少なかったかもしれない。だが、本部として、参加者が遊びたい時に遊びたいように遊べる支援ができたこと、キャンプ中の子どもたちの笑顔、キャンドルファイヤーでの子どもたちの大びた表情や、解散式でのキャンプの終わりを惜しんでいるところ。それを見られただけで不安や大変だったことが吹き飛び、ひたすらやり甲斐と喜びに変わった。(春高学年キャンプ プログラムリーダー・マネジメントスタッフ・女性)